

## 戯曲『大いなる館』（1） ユージン・オニール

西澤光代（訳）

## 序

ユージン・オニールの作家生活における最後の10年間を主として占めていたのは、「サイクル」（Cycle）と呼ばれる一連の連作劇「所有欲と自己喪失の物語」（‘A Tale of Possessors Self-dispossessed’）であり、彼の劇作家としての経歴の頂点となる筈であった。それはハーフォード家というアメリカ人家族の運命を辿り、人間を腐敗させる物質的な力が、様々な登場人物にどのような影響を及ぼしてゆくかを吟味していく内容であった。この連作に関して、オニールは1941年5月22日の『創作日記』に次のように書いている。「構想が11作品にまで拡大したということ、私はまだ誰にも話していない——余りに常識外れではないか——構想では、最初5作品の予定であったが、それから7つになり、8つになり、9つになり、今では11にもなった——生きているうちに完成することはできまい——だが、こんな世の中では、夢ぐらいは大きくてもよいではないか」。

彼はその時には、初めの4戯曲の最初の手書き草案を書き上げ、9連作のうち残りの5戯曲の覚え書きとアウトラインを準備していた。しかし最初の2戯曲は、1940年10月20日、自ら認めていたように、余りにも長くなり過ぎた。——「双方とも『奇妙な幕間狂言』と同じくらい長くなった。そして複雑になりすぎた。余りにも多くの事を取り入れようと試みたのが理由である。つまり心理学的及び精神的に多くのテーマとモチーフを織り込み過ぎたのである」。

6ヶ月後、この2戯曲を4作品に拡大しようと決めたのも、そうでもしなければ解決不可能な問題、つまり、いかにしたら上演可能な長さに短縮できるかという問題に対しての、彼の絶望的な解決方法だった。続いて、このようにして熟考の末、拡大された戯曲に対する覚え書きを用意し、この新しい計画に従って実際に第3、第4の戯曲を部分的に書き直してもいた。しかし、病気や世界情勢に対する絶望のために、彼はこの夢を実現することができずにいた。オニールと妻カーロッタは、1943年2月21日夕オ・ハウスで、9篇よりなる連作劇の最初の2作品であった『柔和なる者の欲』(‘Greed of the Meek’)と「我に死を」(‘And Give Me Death’)の原稿を燃やしたのである。

だが、この連作完成の希望を達成できなかったとはいえ、彼は1943年までに、連作3番目の戯曲『詩人の血』(*A Touch of the Poet*, 1936年執筆、1957年出版)を満足できる程に仕上げている。また4番目の戯曲『大いなる館』(*More Stately Mansions*) (註) について第3回目の改稿の大規模な修正を部分的に終えてもいた。そして彼は、この連作劇を一時中断して『氷人來たる』(*The Iceman Cometh*, 1939年執筆、1946年出版)、『夜への長い旅路』(*Long day's Journey into Night*, 1940年執筆、1956年出版)、『ヒューイー』(*Hughie*, 1941年執筆、1959年出版——これは「葬儀として」(‘By Way of Obit’)と題される計画であった一幕劇シリーズの第1作である)、更に、最後の作となった『廃者に照る月』(*Moon for the Misbegotten*, 1941年～42年執筆、1952年出版)を書いた。

『大いなる館』についての覚え書きは、1935年2月に書かれ、4幕とエピローグから成るこの戯曲の最初の手書き原稿は、1938年9月8日に仕上げられた。オニールはこのことについて『創作日記』に次のようなコメントを添えて記録している。「多大な改訂と書き直しを要する。『奇妙な幕間狂言』と同じ程長くなってしまった!——だが長さはさほど短縮できまい」。2度目の手書き原稿は1939年1月1日に、3度目の原稿(最初のタイプ原稿)は同年1月20日に完成した。1940年及び1941年には、これを上

回る改訂がなされ、書き直しについての更なる覚え書きが書かれている。そしてオニールはこのタイプ原稿に大いに満足したのであった。そのため1943年2月に、連作のうち最初の2作品と共にこの作品の手書き原稿〈初稿〉が燃やされた時も、このタイプ原稿は燃やされずに廃棄を免れたのである。しかし、それでも彼はこのタイプ原稿に「未完。私の死亡時には、この原稿を破棄すべし。ユージン・オニール」と書いた注意書きを挟んでおいたのであった。

1951年、ユージン・オニールとその妻カーロッタ・マントリー・オニールが共に病気になり、彼らのマーブルヘッドの家が売却されようとした時、イエール大学にあるオニール・コレクションに送られる書類を入れた大箱の中に、計らずも『大いなる館』のこのタイプ原稿〈改訂版〉が紛れ込んでいたのである。図書館側では、未出版原稿は学者達にも利用させるべきでないという旨を了解していたので、このタイプ原稿に関しても、オニール夫妻との間に何の問題も起きなかった。

オニール氏が1953年に亡くなった後、オニール夫人から例の連作に関する資料は全て25年間凍結するようにとの依頼があり、この時もまた『大いなる館』の原稿を最終的にどう決着するかについての意向を尋ねる理由もないように思われたのである。1956年5月、『夜への長い旅路』が出版され、『詩人の血』を出版する手筈が結論として決められた。その後、私がオニール・コレクションの責任者である立場上、オニール夫人から私に電話があり、一幕劇『ヒューイ』以外にも完成原稿があるか否かを尋ねられた。私は当然ながら『大いなる館』のタイプ原稿があることを報告した。彼女は、この作品の草稿はすべて1943年に廃棄してしまったものと思っていて、その原稿を返して欲しいと私に依頼した。私はこれを5月16日に返したのだが、オニールが挟んでおいたあの注意書きを初めて取り除き、それをコレクションの中に残しておいた。1957年春、オニール夫人は当時スウェーデン王立劇場の演出家であったカール・ラグナー・ギーロウ氏に、この戯曲作品が存在するという情報を知らせた。そして、最終的

にストックホルムの劇場（そこで『夜への長い旅路』が初演された）で、スウェーデン語訳によって上演可能にするためには、原稿の短縮を試みてもよいという許可を与えたのである。その時点では、スウェーデン語にしる英語にしる、これを出版するのに問題は起きなかった。ギーロウ氏はこのタイプ原稿をスウェーデンに持って行き、写真に撮ってからオニール夫人に返した。夫人は1959年4月8日、これをイエール図書館に返した次第である。

5年後、ギーロウ氏は、作者自身の覚え書きを一部参考にしながら、更にオニールの用いた言葉しか使用しないようにとのオニール夫人の条件に従いながら、上演用脚本版の作成に成功した。彼は、1幕1場全部を省き（つまり1幕の残りの場と2幕1場、2場を繋いで単独の1幕とした）、エピローグをも省いたのである。省かれた部分は各々『大いなる館』の直前と直後にくる『詩人の血』と「平穏なやぎ座」（‘The Calms of Capricorn’）とを繋ぐものであった。ギーロウ氏は、同様に3幕（現在の2幕）の始めの部分（セアラの4人の息子が祖母デボラと共に登場する場面）を省いた。オニールが書いた重要な要素、即ち、人物やセットに関する記述、多くのト書き、そしてこの時代のアメリカ情勢についての言及の大部分、そういった要素を含む多くの言葉や句や節が至るところにあったため、それらを省略する訳にはいかなかったのである。そういう訳で、1962年11月9日、この短縮版がストックホルムで初演された時、ギーロウ氏は印刷されたプログラムの中で「今夜上演されるこの劇の中には、オニール自身によらないものには、一場面も、一行も、一言一句たりともありません」という事を観客に確信させることができたのである。

オニール夫人は、この劇は将来スウェーデン王立劇場のレパートリーの内でのみ上演されるべきだと現在考えているのだが、その原本はオニールの作品を学ぶ人達の手に入るようにしてもよいということには同意している。と言うのは、ギーロウ氏とクワン・バーテル氏が準備したスウェーデン語翻訳版の完成原稿を短縮してギーロウ氏版が作られたのであるか

ら、そのスウェーデン語翻訳版にあるオニールの言葉に相当する英語の語句を、元のオリジナル英語原稿と参照しながら確定しなければならなかったのである。この仕事の責任を負っているのが私である。

上演用脚本<sup>(1)</sup>（配役のメンバー、及びこの上演に直接関わった人達にのみ配布されていたもの）に用いられていたより、もっと多くの事柄、即ち、オニールが登場人物や舞台装置について描写した多くの事柄が読書用版に加えられるべきだということが直ちに明らかになった。ギーロウ氏の承認を得て、私はスウェーデン語版になかった短い節をいくつか復元もした。その目的は主として、スウェーデン語版でなされた修正変更のために読者が感じる唐突感を和らげることであった。私は、オニールの原文編集を最小限に留めてきた。私を変えたり、加筆した言葉は、恐らく全部合わせても若干でしかないだろう。綴りやタイプミスを含む明瞭な誤りは改めておいた。句読点はある程度統一した。だが、これ以外の言葉はオニールが用いた通りである。

現在出版されているこの戯曲には、オニールの完全タイプ原稿の半分以下しか入っていない。作者自身もタイプ原稿には削除するための印を相当数付けていたのだが、そういう訳で、これは必然的に作者が思い描いていた完成作品とは程遠いのはやむを得ない<sup>(2)</sup>

もしオニールが生きていて、この劇が出版され、上演されるのを見たら、いつもやっていたように、ゲラ刷りでも、その後の校正原稿でも、そして上演過程でさえも、きっと大幅に修正し、書き直したことであろう。それでも尚、この『大いなる館』は、例え未完の修正状態であってさえ、『詩人の血』よりもオニールが連作劇（サイクル）で意図していた事をよりよく示しているのである。判断力には信頼をおいてくれていた私という友人の手で短縮されたのであるから、オニール自身もこのテキストを出版するにあたって、正当たる権限を与えてくれたことであろう。

## 註

『大いなる館』という題は、オリヴァ・ウェンデル・ホームズの書いた詩「オウムガイ」(‘The Chambered Nautilus’) から採っている。オニールは劇中、3幕1場(1841年に時代設定)でサイモンに引用させているが、この詩が出版されたのは1858年のことである。

## 訳者註および解説

- (1) 上演用脚本は、序文にもあるように、上演に直接関わったスタッフのみに配布された。

オニール・アーカイブスで全編聞くことができる。

(上演にあたっては、当時所謂イングリッド・バーグマンのカムバック公演として、彼女のデボラ役が一世を風靡したとのことである。アーカイブスで、彼女の演技が聞かれる)。

- (2) つまり、英語版だけでも、3種類のヴァージョンがある。

上記の上演用ヴァージョン、ドナルド・ギャラップ氏が編集して名付けた読書用ヴァージョン(Reading Version)、後に出版されたオニールの原文通りのオリジナル・ヴァージョンの3通りがある。

(拙論、*More Stately Mansion* 論(その1): 3種類のヴァージョンの意義に関する比較検討研究—新潟大学言語文化研究, 7号. pp275-286, 2001年—参照)

- \* 訳者が原本としたのは、1964年英国にて出版された所謂「読書用ヴァージョン」である。(Jonathan Cape社)(著作権は購入取得済み)

(他にも、同年Yale University Pressからも出版されている。両者の違いは、当然ながら、前者英国出版のものは、所謂英国綴り、後者は米国綴りである。内容には違いはない)。

尚、この出版に関しては、双方とも奥付きに次のように書かれている。

Shortened from the author's partly revised script by Karl Ragnar Gierow and edited by Donald Gallup

即ち、序で詳細に書かれているように、オニールの未完原稿を、まずギーロウ氏によってスウェーデン語に翻訳され、上演可能にするために短縮を試みられたのである。それが、序に書かれているように、英語版が作成されるにあたって、ギャラップ氏による相当の努力の結果、1964年に出版されるに

至ったのである。

序に繰り返し述べられているように、あくまでもオニールの言葉しか使われていないゆえに、オニール作として翻訳することを了承頂きたい。

- \* 1988年、Oxford University Pressよりこの作品のオリジナル・ヴァージョンが出版された。当然ながら、これはオニールが書いたそのままのものである。（1939年9月8日、タオハウスにて、とオニールが一応の執筆完了を示す言葉が最終ページに書かれている）。

前に来る『詩人の血』との繋がりを重視してあり、セアラの両親も登場させるなど次への繋がりがよりスムーズに運ぶ工夫がなされているが、大部であり、未完の状態であることは否めない。

翻訳にあたった読書用ヴァージョンでは、サイモンが「母親」を選んだ結果で終わる。それに対して、オリジナル・ヴァージョンでは、やがてデボラは亡くなり、サイモンは退行した子供状態が続く。彼自身の子供達が、父親が自分たち兄弟の一人となったかの如き状況で戸惑う。セアラはサイモンに対してずっと母親役を続ける。

物欲、所有欲といったもの、望むものを入手しても限りなく欲望はとどまることを知らず、サイモンの会社も破産してしまい、何もかも失うのだが、そのような過程を経てさえ、セアラは、最終場面、自分の息子らに託す物質的期待（銀行を所有、鉄道会社の所有など）を夢見ながら物語は終わる。自滅も自己喪失も欲望を防ぐことはできない。

これが、オニールが生涯賭けて追及したテーマの一つであった。

（この稿と翻訳をもって、*More Stately Mansions*論（その1）としての続編として、一応の完結とさせて頂きたいと考えております）。

## 追記

尚、この翻訳作品は、第1幕、1場、2場、3場を法政理論No.1（2014年度）、第2幕、1場、2場、3場を人文学部の英文学会誌（同）、最後の3幕、1場、2場は法政理論No.2（同）に掲載をして頂くことになっています。

その後、更なる修正を加えて、1冊のまとめを出版出来たらと願っています。

## 登場人物

サイモン・ハーフォード

セアラ・ハーフォード、妻

デボラ・ハーフォード、母親

ジョウエル・ハーフォード、弟

ニコラス・ギャツビー、ハーフォード家弁護士

ベンジャミン・テナード、銀行家



## 場面設定

### 第1幕

第1場：マサチューセッツのある村。小さな湖のそばにある丸太小屋。

1852年10月のある午後。

第2場：デボラ・ハーフォードの庭園。つまり、街中にあるヘンリー・

ハーフォードの自宅。

1836年6月の夜。

第3場：繊維工場近くにあるセアラ・ハーフォードの家の居間。

翌日の夜。

### 第2幕

第1場：街にあるサイモン・ハーフォード社の中のサイモンの事務所。

1840年、晩夏のある朝。

第2場：デボラ・ハーフォードの庭園。

同日の夕刻。

第3場：ハーフォード家の居間。同日の夜。

### 第3幕

第1場：サイモン・ハーフォードの会社。

1841年真夏のある朝。

第2場：デボラ・ハーフォードの庭園。同日の夜。

## 第一幕 第一場

### 場面

森の中の湖の岸辺にある丸太小屋。時は、1832年10月の某日、午後3時直前。マサチューセッツ州の某村から2マイル程度の距離。

小屋は巾10フィート、奥行き15フィートの丸太造り。森を切り開いた小さな空地に建っていて、あたり一面雑草がはびこっている。手造りの屋根は反っている。小屋の正面は、中央にドア、その左側に小さな窓があり、そこから湖が見晴らせる。右手壁面にも窓。左手後方に石の煙突。小屋の左手と後方はすぐそばまで森—— 樅、松、樺、楓の樹々。森は針葉樹の深緑に、紫、赤、金色の葉が群れ混じって、鮮やかな秋の色彩に満ちている。

小屋は長年使われた形跡がない。煙突の石と石の間のモルタルが、所々ぼろぼろに崩れ、剥げ落ちている。丸太の間にびっしり生えた苔が、あちこちで細長く垂れ下がっている。窓は板を十文字に打ち付けられている。正面のドアの左手の壁際にベンチがある。風雨で傷んではいるが、しっかりした手作りでもまだ頑丈である。

空地は陽が射している所と、森で日陰になっている所がまばらになっている。

幕が開くと、右手小屋の角にセアラが現われる。25歳。典型的なアイランド系で非常に美しい女性である。豊かな黒髪、色白の肌に蔷薇色の頬、美しい紺碧の目。彼女の外観には、いわゆる貴族的な要素と農民的な

要素が奇妙に混じり合っている。即ち、額は思慮深そうで端正、目は美しいばかりでなく知性的である。鼻筋が通ってきれいな形の鼻、ほっそりとした首に形の良い頭に小さめの耳がぴたりと付いている。それに対して、分厚いが引き締まった唇の辺りに、若干粗野な官能性が漂っている。また、顔の他の部分と比べて幾分大きめでずんぐりした顎からは、男性的な強情さと決断力が窺われる。ゆったりとした黒の喪服で体型を隠しているが、現在妊娠6か月は見た目に明らかである。強い身体と豊満な胸。健康と生命力に溢れ、妊娠中にも拘らず優雅さを失っていない印象を受ける。しかし、太い足首、大きな足、幅広く丈夫な手、太くて短い指が欠点といえる。声は低く、歌うように話す。アイルランド訛りを入れずに話すのが、感情が激した時にはその訛りが出てくる。

明らかに、急いで来たらしく、息を切らし喘いでいる。そっと空地の周囲を見回す。挑むような怒りと罪悪感の混じった表情。急いで小屋のロックを外し、鍵を内側に入れ替える。ドアを少し開いたままにして、人目を忍ぶように左手前方の森の端まで行き、空地から森の中へと通じている小道をじっと見つめる。それからぎくりと驚いて素早くドアの所へ戻り、小屋に入って音をたてないように後手でドアを閉め、内側から鍵をかける。しばらくの間静寂。それから、サイモンの母親デボラ（ヘンリー・ハーフォード夫人）が小道から空地に登場。

デボラは45歳だが、ずっと若く見える。小柄で5フィート足らず。ほっそりして若い娘のようで成熟しきっていないような体つき。小さな顔は、驚く程若々しく、目と口の辺りに僅かに皺の跡が表れ始めているだけである。顔の周りに波うっている豊かな白髪が、その若々しさと対照的なので、見たところ仮装舞踏会で似合ったかつらをつけている娘といった印象である。華奢で優美な鼻。口は顔の割には大きくて際立ち過ぎている。ふっくらとした唇は、顔の割に強く大き過ぎる。微笑すると白い大きな歯

が見える。少し膨らんだ広い額に窪んだこめかみ。鼻の上の方に輪郭のはっきりとした眉。その下に深く窪んでいるように見える大きすぎるくらい黒い目。小さい手にはっそりした強くて先細の指。足もとても小さい。衣服に細心の注意を払い、また趣味も良い。全身白づくめの服装。

デボラ (空地を見回す —— 苦々しく、自嘲的に無理に微笑もうとする) 何が期待できるっていうの。この位の年にもなれば、引退して、殿方の思い通りに気の済むようにして差し上げなくては。例え自分の息子であっても。(雑草をぬって、しとやかにベンチの方へ歩を進める) 年ですって? まるで皺だらけの老婆みたいに年のことばかり言って。まだこれから先何十年もあるじゃない。(腰を下ろす) それにしても、その何十年を、どうやって生きていくの。夢でも見て過ごすの? サイモンに見捨てられてからずっとそうだったわ。夢の中で戻って行く先の私は、名の知れた立派な実業家の狂気じみた妻なんかではない。夢の中の私は、ルイ王の宮廷であらゆる手段を用いて地位や富を求める気高い女性なのよ。あの壁で囲まれた私の小さな庭はベルサイユの庭。情緒豊かなあのあずまやは「愛の神殿<sup>やしろ</sup>」。それは王様が逢引きのためにお建てになったもの。王様が私と情熱的な密会を重ねるための。私は欲望と権力を貪る王様の愛妾! 全く、私ったら、本当に少し狂ってきたわね。気を付けなければ! そのうち、こんな現実離れた有害な空想にのめり込んでしまったら、自分を見失って戻る道がわからなくなってしまう。(大胆に虚勢を張って) いいわ、そうだったって! 私は自分を見失うのは大歓迎よ! (急に口をつぐむ —— 腹立たしそうに) なんて、馬鹿々々しい! こんな気違いじみた自分との対話を果てしなく繰り返すなんて! 私は自分以外の誰かを見つけなくては。信頼できる人を。自分から逃れることが

できるように。—— 誰か強くて、健康で、狂っていない人。人生について本を読んだり夢見たりするのではなく、貪欲に人生を愛して生きていく勇気のある人。（嘲笑するように）ああ、またサイモンのことを考えているのね。あの下品なアイルランド女中の夫じゃない私のサイモン。今じゃ、あの子には、あの女の腕の中が心地よい憩いの場になっているのに。それは確か。そうよ。じゃあ、私なぜ来たのかしら？ 多分、あの子は来やしない。あの女が来させやしない。午後ずっと座っていて、あの子の楽しみのために待っていなきゃならないの？（急に立ち上がりながら）もう帰るわ！（自分の感情を抑え——無理に分別のある調子で）馬鹿ねえ。あの子は、召使いに来ると伝えさせたのだもの。私との約束を破るようなことは決してしない。あの女のためだとしても。（再び腰を下ろす）私の方が早く来たのよ。短気はやめて、苦しいことは考えないで、何とか時間をつぶすわ—— どんな夢でも、どんな馬鹿げたことでも—— 目を閉じて忘れるの—— あの子が来るまで、目を開けないで——（頭をそらし、目を閉じて力を抜く。間。それから夢心地になって喋りだす）バルサイユ宮殿。私が身に纏っているのは、金糸を織りこんだ真紅のサテンの夜会服。真珠の縫いとりがしてあって。ルイ王が私に腕を貸し、宮廷中が羨ましそうに見ている—— 私が野望のために利用して捨てた昔の恋人達、私の恋人になりたくても望む勇気もない男達がいるわ。女達は、私の才気と美貌を憎み、恋の手練手管や男心に通じているのを妬んでいる。私は王と共に庭をそぞろ歩く—— 王は甘く囁く、「愛しき者よ。我が玉座、そは汝が心。我が美しいの王国、そは汝が美なり」そして、この唇に口づけをされる。私のために王が建てて下さった小さな愛の神殿へと私は誘う——

(左手前方の小道の上手にある森から物音。デボラ、途端にはっと我にかえって目を開く。サイモン・ハーフォードが空地に登場。26歳だが落ち着いた物腰のためにずっと円熟して見える。長身で、細いが強く柔軟な四肢。面長のアメリカ人系の浅黒い顔で、インディアンに似た要素がある。大きくて真っ直ぐな鼻。大きく、繊細そうな口許、秀でた額に大きな耳。髪は豊かな褐色である。目は薄茶で、目と目の間が離れている。その目には、鋭い観察力と辣腕さが表れているが、その奥ではじっくり熟考する様子も窺える。物静かに、太く低い声で、少し引き延ばし気味に喋る)

サイモン お母さん！（大股で近づく）

デボラ （立ち上がりながら —— 喜びながらも尊大な調子で）私を待たせるなんてさぞかし楽しかったことでしょうね、ムッシュ。

サイモン （当惑する —— それから、冗談だと受け流して笑う）とんでもございません、マダム！ 僕は時間通りに来ました。お母さんが早かったのですよ。（キスする）会えてとても ——

デボラ （尊大さが消える —— 狂乱状態とも言える程にサイモンにしがみつきのながら）ええ、ええ、かわいいサイモン。（すすり泣き始める）

サイモン お母さん、やめて。泣くなんて！ 今まで、泣いたことなんか無いのに。

デボラ （自分を引き離して）そうね。下手な始め方ね。若い内なら涙も似合うけれど、年をとるとただ気味悪いだけだわ。（ハンカチで目を押える）

サイモン 相変わらず若くてきれいですよ。

デボラ まあ、女性にご親切な方だこと。でも、鏡はもっと残酷よ。この皺が見えないとでも？

サイモン 少しはありますが、年の割には ——

- デボラ （憤慨したように彼を一瞥する。無理に笑って）その通りよ。これでも保存状態はいい方だね。でも、年寄り女の虚栄心の話なんかで貴重な時間を無駄にするなんて馬鹿らしいことね。（サイモンの肩に両手を置く）さあ、そちらを向いて。公平にね、よく見せてちょうだい。変わったわね。予想通り相当にね。お父さんにそっくり。成功を収めた実業家らしくなって。
- サイモン （顔をしかめ、向きを変える）そっくりなんて嫌だなあ。まあ、座って。（デボラ、座る。サイモン、立ったまま小屋を調べるようによく見る。ドアを開けようとして — ポケットを探る）おかしいなあ。確かに鍵を持っていた筈なんだが。だけど、却ってよかった。憂鬱になるだけだから。
- デボラ そうね。いつだって、夢の残骸を見るのは悲しいことだもの。
- サイモン （考えずに答える）そうですね。（それから弁解するように）もっといい夢を見つけられたなら、また別ですがね。
- デボラ セアラはいかが？
- サイモン 元気で — そして幸福ですよ。
- デボラ 相変わらず愛しているのね？
- サイモン 前よりずっと。僕たちほど幸福な結婚はないでしょうね。
- デボラ 結構なこと。手紙で、いつも幸せだって言ってきてたわね。子供達は？ 近い内にもう一人生まれるんでしょう？
- サイモン ええ。
- デボラ この出産ていうものはね — セアラにもかなりの負担に違いないわね。今でもきれいな？
- サイモン 今までよりきれいなくらいですよ。
- デボラ 今日、一緒に来るんじゃないかと思っていたのよ。
- サイモン 僕と二人きりで会いたかったんじゃないのですか。
- デボラ そうよ。でも今は、どちらでも同じだったような気が — （すくぐ）セアラがあなたを来させないかも知れないって、思いか

けていたので ——

サイモン まるで、僕が奴隷みたいな言い方ですね。

デボラ ええ、恋している時は誰だってそうじゃない？ 詩人はそう書いているわ。

サイモン 愛のためなら、奴隷にだって喜んで。でも、なぜセアラがそんな ——

デボラ まあ、女の愛とは嫉妬深くて独占欲が強いものよ —— 本にそう書いてあったわ —— いつも私達二人がどれ程親密だったか、彼女は知っているわ。あの頃、私と一緒にいて、幸せだったでしょ？

サイモン もちろんですよ、お母さん —— 最高に幸せでした。

デボラ 嬉しいわ、まだ覚えていてくれて。(彼の手を軽く叩く)

サイモン それに、あれからも僕達二人のためにして下さったこと、感謝しています。

デボラ 彼女でしょ、返済するって言い張ったのは？ 私はプレゼントのつもりだったのに。

サイモン セアラはとてつもなく繊細で、プライドも高いから —— (急いで) でも、とても感謝していますよ。僕と同じくらいに。彼女もご親切は忘れません。

デボラ セアラが喜んでくれて、有難いわ。ねえ、サイモン、あの本のこと、まだ考えているの？ お父さんの事業が嫌で会社をやめて、独りでここに住むようになった時、あんなに書きたがっていたじゃないの —— 人間に貧富の差がない新しい社会を作る計画のこと。あの考えは、すっかり捨ててしまったの？

サイモン 今のところはね。考えることはよくあるけど。

デボラ なるほどね。

サイモン どうして、今、そんな事を訊くんですか？

デボラ 多分、ここへ来たから思い出したんでしょうね。それに、本当



に書くべきだわ。そんな本を書く機が熟しているのよ。ジャクソン大統領は、またもう4年間政権を握るでしょう——あなたのお父様でさえ、きっと再選されるだろうって認めているし——そうしたら、世の中、変わりようがなくなるわ。将来ずっと、無知で貪欲な大衆に支配されることになるのよ。かわいそうに、お父様ったら、マサチューセッツ州が合衆国から離脱できたらいいなって。あの人、ジャクソンという名前を聞いただけで、ひどい消化不良を起こすのよ。

サイモン お父さんが大衆を侮蔑するのは、馬鹿げた俗物趣味です。自由社会というところでは、貪欲さゆえに人間を隷属させ合うような私有財産があってはならないのです。人間が精神的に所有本能を超越できるように教育されるまで、愚かな所有本能から護らなければ。簡単に実現できることだと僕の本で証明します。ただ人間が——

デボラ ええ、そうね。もし、ただ、人間が、男も——そして女も——今のような男と女でなければね！

サイモン セアラと同じくらい皮肉っぽいですね。彼女の反論も同じです。でも、完全な社会の話なんか退屈でしょう。

デボラ とても嬉しいのよ。あなたが、まだ夢を持っていると分かって。

サイモン 久しぶりだなあ、こんな事を話したのは——お母さんは、いつも共感しながら聞いてくれましたね。

デボラ 私は今だって同じよ。でも、あなたの方はどう？

サイモン 今でも、僕は今まで通り、確固としてルソーを信奉しています。つまり、人間性とは根本的には善良で無欲だということです。それを墮落させたのは、我々が文明と呼んで喜んでる代物です。我々は自然と純朴に還らなくては。そうすれば分かってきます。お父さんが貪欲な大衆と嘲っている人々が、真に気高く

て立派なのだ。現代社会のエセ貴族社会も、自分達がそのような存在だと取り繕ってはいるけれど！

デボラ それでも、やはりあの人達の太い足首や醜い手や汚い指の爪、ああいうのを見ていると吐き気がする。いくら気高い心を持っていてもね！ まあ、私ったら、人間の本来の権利について話し合うために、ここに来たのかしら。第二のノアの洪水が起こって、この地からこの愚かな人類を一掃して、地上をきれいに洗い流して、と祈っているこの私が！（立ち上がる）遅くなるわ。もう帰らなくては。

サイモン 帰る？ 来たばかりなのに！ さあ、座って、お母さん。（デボラ、再び腰を下ろす）まだ、お母さんのこと何一つ話してくれてませんよ。

デボラ ご親切に耳を傾けてくれても、私の言うことは聞かないでしょう。

サイモン いつも聞いていたじゃないですか。

デボラ ずいぶん昔はね。もう別世界のこと。二人共変わってしまう前のことね。

サイモン 僕のこと、そんなふう思い込んでいるなんて、心が痛みます。

デボラ ああ、私にはもう何を信じていいのか、誰を信じていいのか、わからない！

サイモン 僕のことまで？

デボラ 自分さえもよ。

サイモン どうしたの？ お父さんが何かしたのですか。

デボラ 馬鹿ねえ。お父さんは、ジャクソン大統領が次に何をするか、何を言うか、そして、それが輸出入にどんな影響を与えるか、そんなことばかりに一生懸命悩んでいるわ。私のことなんてかまってもらえないのよ。もっとも、かまったりさせはしないけれど。

- サイモン ジャあ、弟のジョウエルが何かしたのですか？
- デボラ ひどくなる一方よ。あの子。あなた、自分で見たら分かるわ！  
経理部長をしているけど、そのあたりがもう能力の限界ね。
- サイモン ジョウエルに能力なんかないですよ。
- デボラ もう、凝り固まった帳簿の虫そのものになってしまっているわ。あの子、私の名前が利益貢献者リストに載ってるかどうか調べたのよ。でも載っていないものだから、私は想像上の存在に過ぎないって結論。つい最近も、私の庭に招待したらね——
- サイモン また一体どんな用があって招待など。
- デボラ かわいそうにね。まるで、尼さんの寝室に招かれたみたい、びっくり仰天って顔なのよ。そして来た時にはね——何と云うか、感心できない女性にお義理の訪問をする正しき紳士といった様子なのね——やがて決然として一分の隙もなく陳腐な挨拶を引用文みたいに並べてね。落ち着かない様子で30分もじっと花を眺めていて。それから逃げ出して行った。あの子の様子を見てたら笑っていたでしょうよ。
- サイモン そうでしょうね。あいつにはさぞかし場違いだったに違いない。
- デボラ 本当にそう。だから、あの子に嫉妬する必要なんかないわよ。そう、私がジョウエルのせいで変わったりなんかする筈ないわ。あり得ない！
- サイモン ジャ、どういう訳ですか。
- デボラ 何も起りはしなかったわ。時が流れて、変わっただけ。
- サイモン とても寂しそうですね。
- デボラ （彼の手を軽く叩きながら）分かっているじゃない。でも、今あなたとこうしているとましよ。
- サイモン 信じられない。お母さんは、いつだって他人に左右されたことなんかなかったのに。

デボラ でもね、突然不満が心を蝕む時ってくるものなのよ。庭の壁越しに、人生に憧れの目を向けているのに、人生はまだ生きている者がいることに一切気付かないで通り過ぎてしまう。ぞっとするわ！

サイモン 人生がお母さんを通り過ぎてしまったなんて、どうして？ お母さんは——

デボラ まだ美しくて、人生の方から言い寄って来る間は、見向きもしない態度というのも、毅然としてプライドがある立派なものよ。でも、事態が変わって反対に、人生の方が無関心になって、見向きもしてくれなくなった時—— まだそこまで私はひどいとは思っていないけど。でも、いずれはそうなるでしょう。私の中を刻々と流れていく時の波の中にいつも感じるのよ。人生を軽蔑して来た者に対する、人生の悪意に満ちた憎しみをね！ でも、肉体なんて大したことじゃない。魂よ、大事なのは。自分の鏡を覗き込んで、そこに映った死神の頭蓋骨が肩越しに流し目で誘っているのを見る魂よ！

サイモン (嫌悪感で尻込みしながら) お母さん！ それは余りにも病的です！

デボラ かわいそうに、サイモン。母親というものは、決してそんなことを考えてはいけなかったのよね。許してね。

サイモン 今でも完璧な役者ぶりですね。昔と同じだ。

デボラ まあ、何てことを言うの！

サイモン 昔、お伽話を読んでもらっていた時のことを思い出していたんです。いつも、それぞれの役を上手に演じわけてくれましたね。ある時は善良なる妖精、ある時は立派な女王、またある時は虐待されているかわいそうな幼い王女—— それは素晴らしかった。でも、また次の瞬間には、恐い女王や邪悪な妖精や意地悪な魔女になったりすると、もう恐ろしくって身体中に鳥肌

が立ったものですよ。

デボラ あなたは、感性も想像力もとても豊かだったわ。子供にしては。

サイモン この頃では、どんな役を演じているんですか。

デボラ （堅くなる。サイモンの目を避けて、無理に笑って）馬鹿々々しい。今じゃもう観客はいないのよ。忘れたの？

サイモン （からかうように）観客はいつもお母さん自身だったでしょう。だから、さあ、話して。

デボラ 私が18世紀の昔に戻って演じる役がどんなものか、あなたが知ったら、ひどいショックを受けるでしょうね。

サイモン お母さんの意地悪な魔女で最悪な事態も覚悟はできてますよ。

デボラ （冗談めかして。しかし続けているうちに心の奥から衝動的にどんどん真剣になってしまう）今度のはどんな魔女よりも不道徳で危険なの。夢の舞台は過去だけど、実際の人生は現実なのだから。

サイモン じゃ、その恐ろしい秘密を白状して。余り恐がらないって約束するから。今度は邪なフランス女王ですか？

デボラ （突然自分を解き放って —— 尊大に）いいえ。私は、玉座の背後に潜む隠れた権力者の方が好き。貪欲に地位や権力を求める女。才智と魅力でどん底から貴族までのし上がって —— 愛を利用はするけど、愛しているのは自分だけ。徹底的に情け容赦なく、自分の目指す権力の座を手に入れるためには、いかなる邪魔も許さない。王の寵愛を一身に受け、彼女への情熱に溺れた王を奴隷にしてしまうの！（異様に熱のこもった歓喜の調子で話し終える）

サイモン （驚きと不快感で）お母さん！（デボラはほんやりとだが、ぎくりとする。サイモンは急いで言葉が続ける）いや、ショックを受けた訳ではなくて、だがとんでもなく馬鹿々々しい！（デボラは、まるで彼に顔を殴られたかのようにすくんで身を縮め

る) いや、嘘ですよ。確かに一瞬ショックで愕然としましたよ。(くすくすと笑う) でも今は、そんなお母さんの姿が目には浮かびますよ。壁に囲まれた庭に座って。全身白づくめの服を着て。人生のあらゆる下劣さから周到に護られている。とても繊細で潔癖で超然としている —— それなのに尚、夢の中では乱れたフランス宮廷の回顧録から作り上げた不埒な恋愛ごっこに耽っているなんて! (嘲り笑う)

デボラ (思わず激怒して、目に鋭い憎しみの色を浮かべ、激しい、威圧するような尊大な態度で胸を張る) よくもこの私を嗤いましたね、ムッシュ。気をお付け —— ! (サイモンが驚きと怯えでデボラを凝視している間に、デボラは自分を抑制し、ヒステリックに作り笑いをする) ほーら、私は今でも迫真の演技ができる女優になれるのよ。まあ、まあ、サイモン、あなたの怯えた顔ったら!

サイモン (ほっとして、きまり悪そうに、笑う) 僕をからかったのですね。一時、本気かと思いましたよ。

デボラ まあ、お母さんたらかわいそうにすっかり気が狂ってしまったなんて、思わないでね。さあもう、私の馬鹿げた冗談は忘れて、常識に戻りましょう。時間がないのだから。この頃、お仕事の方は進んでいるの? 手紙では随分成功しているようね。

サイモン ええ、まだまだ大したことはありませんが。

デボラ もっと成功したいのでしょ? きっとやれるわ。だってセアラが側にいて励ましてくれるのだから。

サイモン ええ、何もかも彼女のためです。

デボラ 分かるわ。

サイモン 分かるって何を? 彼女のお陰で ——。

デボラ もちろんそうよ。でも、そういう意味ではなくて。ちょっと、非現実的だったけど —— つまり、多分そうやって、あなたは

本当の自分からずっと隠れているのかしら。

サイモン まさしく非現実的ですね。

デボラ だって、手紙では、町の人はあなたのことを若手の実業家の中では一番才能があると考えているって、自慢していたでしょう？

サイモン 自慢はしてません。自慢なんかしたらお母さんが笑うでしょうから。

デボラ あの時確かに笑ったけど。今思えば、少しも矛盾していないわ。結局は、あなたはお父さんの息子よ。今じゃ、たくさんの点でとてもよく似ているわ。驚くくらいに。

サイモン また、馬鹿なことを。

デボラ 成功したことを恥じているみたいね。

サイモン 恥じる？ 何故？

デボラ 本当に、何故でしょうね？ あなたが完全な社会についての詩人の夢を失くして後悔しているのでないのならね。

サイモン 失くしていません！ それに、単なる夢なんかじゃない。証明でき——

デボラ ええ、分かっているわ。あなたのあの本。でも、あれは諦めたって言ったでしょう。

サイモン このところ、時間がなくて言っただけです。

デボラ このところというにしては、4年間は長いわね。だけど、どうして恥じたりするの？

サイモン 恥じてなんかいません！ 何故そんなにしつこく言うのですか？ まあ、もしかしたら、たまには少し罪悪感がしますが。

デボラ そうなの！

サイモン でも今やっていることは、一つの手段に過ぎないと思出すことにしているんです。目的はセアラを幸せにすること。そのためには、どんな手段でも正当化できるのです。

デボラ 　いつだって、手段が目的になってしまうものだよ —— 結局、最終目的はいつも自分なのよ。

サイモン 　十分な貯えができ次第、引退しようって言ってるんです。そしたら、本を書くんだ。

デボラ 　いくら位で充分っていうのか、セアラと話しているの？

サイモン 　(躊躇して、それから嘘をつく) ええ、もちろん。(間。眉をひそめて夢見がちに) 確かに、毎日の会計事務所の詰め込み仕事にはとことんうんざりしてます —— あんな職業は選びたくなかった。むしろ、自由に、ここで自然と共に自給自足の暮らしをして、ずっと夢を持っていたかも知れなかったのになあ。

デボラ 　ああ。

サイモン 　でも、家に帰ってセアラが幸せなのを見て、この腕に抱いたら、不満を持つことが卑しく身勝手に思えてくるんです。

デボラ 　もちろんよ。危ないのは、あなたの不満が成功のたびにどんどん大きくなって、ついに —— まあ、まさか。まるで不吉な預言者のカサンドラみたいね。ごめんなさい。それにもう本当に私、帰らなくては。(デボラ、立ち上がり、二人は左手前方の小道の所まで来る。突然、デボラ、奇妙な調子で) いいえ、先に行つて。

サイモン 　(当惑して) あの道まで一緒に歩いて行きましょうよ。

デボラ 　言う通りにしてね。私のことを忘れてないなら。昔のように、気まぐれだけど勝手にさせてね。お願い。

サイモン 　(当惑して、だが、微笑を浮かべて) いいですとも。

デボラ 　(サイモンにキスして) さようなら。あなたの不満を率直に手紙に書いてちょうだい。私はいつだって懺悔を聞く母親よ。(デボラ、サイモンの背を軽く押す) さあ、行って。

サイモン 　(躊躇する —— 感動して) 僕は —— じゃあ、さようなら、お母さん。(不本意ながらに背を向ける)



デボラ （突然、悔恨の念に負けて）待って！（デボラ、サイモンを再び抱擁する）私の大事な息子！ ごめんなさい、あなたの幸せを壊すようなことを言って。私の言ったこと、みんな、忘れて。後悔しないで！ 愛こそ全てに値するわ！ 幸せになるのよ！（デボラ、サイモンにキスする —— それから小道の向こうへ押しやる —— 鋭い命令口調で）何も言わないで。行きなさい！

（デボラ、背を向ける。サイモン、一瞬非常に感動した様子でデボラを見つめる。それから、向きを変えて小道を歩いて見えなくなる。デボラ、振り向いてサイモンを見送る。）

馬鹿ね、私ったら！ セアラの腕の中で忘れられてしまうのに。あのアイルランド女中の夫になった息子なんて、私の人生から永遠に追放するわ。もう二度と会わない。

（デボラが最後のセリフを言っている時、小屋のドアの錠が音もなく外され、ドアが開いて、セアラが出てくる。躊躇して、ドアの外にしばらく立っている。やがて、きっぱりとした表情をして、足音を立てずに進み、気付かないでいるデボラの数歩手前で止まる。）

セアラ （丁寧に十分注意を払った発音で静かに話す）失礼致します、お義母様。

（デボラ、恐怖に喘ぐ。振り向いてセアラと向かい合う）

セアラ 嬉しゅうございますわ、またお会いできて —— それに、あなたのこともやっとわかって。私、ずっと、この小屋にいました

のよ。

デボラ 立ち聞きしたのね！

セアラ そのために来たのですもの。もっとも、みんな聞いてしまったら、あなたを恐れていた自分は愚かだったと分かりました。

デボラ まあ、あなたの生まれ育ちを考えれば、低劣で、恥知らずだろうとは思っていたけど、自慢するとまでは夢にも思わなかったわ。

セアラ (傷ついて —— 内心の怒りが現れ始め、それと共にアイルランド訛りが出てくる。が、静かな口調は崩さない) <sup>わたくし</sup> 私にも、誇りがあります。自分の魂を与えてでも知りたいと思う真の女の誇りです。愛を手に入れたら、世界と闘っても離さない。どんなことをしても！ それが私の誇りなんです。(だんだんと自制心をなくしアイルランド訛りになっていく) 私の生まれ育ちをとにかく言うあんたは何なのですか、お高くとまらないで欲しいですね！ あんたなんかあたしに勝てるもんか！ 人生にだって勝てやしない！ でも、あたしは勝てる！ あたしは人生から欲しいものは何でも取って自分のものにできる！ (嘲笑うように) あんたが名誉だなんてね！ 夢の中でさえあんたは何よ。貪欲なうえに男達に手練手管を弄するただの娼婦じゃないか！

(デボラ後退りする。セアラ、前よりは抑えた口調で続ける。)

セアラ けどそれだって夢の中だけでしょう！ あんただって、人生に望みはあるんだろうけど、ただ怖くて、逃げ隠れるだけが精一杯なんだ。庭に一人寂しく座って。年が忍び寄るのを聞きながら。壁の向こうを、人生の足音が遠ざかっていく。まるで、あんたの心臓の音のように。人生は通り過ぎて行くんだ。あんた

のことなんか忘れてさ。恋歌を口笛で吹いて、他の女を夢見ながらね！

デボラ （吃る）嘘よ、そんなの！（気絶するように弱々しく身体が揺れる——疲れ果てて）私——私ちょっと目眩が、私——（ベンチの方へ歩き出す）

セアラ （急に物静かな丁寧な物腰に変わり、訛りのない言葉で、デボラの腕をとる）大丈夫ですか、お義母様<sup>かあ</sup>。少しお休みになられたら。

デボラ （ベンチに崩れるように座る）ありがとう。

セアラ ついかつとなつて、ごめんなさい、お義母様。でも、おっしゃった事は——

デボラ ええ、分かるわ。許してね。

セアラ お話ししたいことがたくさんあるので、小屋から出て来ました。これからお話しします！でもその前に、言いたいのです。サイモンが嗤ったあの時、とてもお気の毒でした。予想してましたから。嗤わないでと祈る気持ちでした。だから、彼が嗤った時には、私もナイフで刺されたように感じました。

（デボラ、一瞬目を上げて、衝動的に感激と驚きの表情で、セアラを見つめる。セアラ、続ける。）

セアラ サイモンのお詫びを申し上げたいの。女の夢の中に潜む嘘の真実が、男性になんて分かるものですか。

デボラ （かすかな微笑を浮かべて）私は、あなたを愚かな人だと思っていたけど、あなたが好きになり始めたみたいだわ。

セアラ （困ったように——無理に冗談めいた口調で）あら、お世辞を言ってごまかさないで下さい。私を何よりも嫌っているのだし、私もあなたが大嫌いです。立ち聞きできて良かったです

わ。疑問とひどい自己嫌悪をサイモンが持つようにと望んでらした。そして、私を非難させたがっていらした。あの人を奴隷にして、詩人になる夢を押し潰してしまった貪欲な愚か者は私なんだって。(嘲笑する) 実の母親なのに、サイモンのこと、殆ど知らないのですね。男の人で、自分の仕事のことでも不満を持ったり、奴隷ぶったりしない人っているかしら。だけど、私のところに帰って来た時のサイモンをご覧になったら——誰かを商売でやっつけて、それは誇らしく嬉しがって、笑って自慢をして——そんなところをご覧になったら——世界を変えるなどという夢の話を利用したり、サイモンに不満を抱かせたりはしません。あの人は何が本当に好きなのか私は知っています。在るがままのこの世界が好きなんです。

(間を置く。デボラは地面を見たまま黙って座っている)

セアラ　でも、私が言いたかったのは、私という人間をご存知ないということですね。貪欲かもしれませんね。それには正当な理由があります。ひもじさほど人間を貪欲にさせるものは他にありません。でも、私は愛の心も持っています。この世のあらゆる欲望にも打ち勝てるくらい大きな愛です。そのことをあなたは知らない。サイモンの幸せのためだと思えたら、何でもします。サイモンと一緒になら、この小屋でも暮らすし、どん底生活だって一緒に暮らせます。サイモンに食べさせるためならジャガイモだって盗んできます。あの人の本を書くためのペンとインクを買うためなら、道で子供と乞食だってするわ。それでも私は愛の喜びで笑ってられる！ さっき、サイモンが十分な貯えができたなら引退して本を書くって言った時、私達にはあり得ないだろうって嗤いましたよね。私の夢に描いているのはた

だ、充分になったらすぐ、土地持ちの紳士としてサイモンを引退させてあげて、子供達を紳士に育てるということですわ。あなたにはアメリカ人としてのプライドもあるけど無知もあるのです。私の父は、アイルランドで酒とギャンブルで破滅してから、アメリカにやって来ました。父の居たあの汚い安宿しか私は知りません。でも、私が生まれたのは父の広大な領地にあるお城のような大邸宅でした。召使いもたくさんいました。厩もあって見事な獵馬が何頭もいましたわ。父は紳士で将校でした。そして、ウェリントン公爵に名誉と共に仕えて手柄を立てました。（不意に）ごめんなさい。お義母様、父のことなんか話して、退屈させましたね——父はどうしようもない酒飲みで気取った嘘ばかり言うてました——でも私が先程言ったことは本当のことなのです。

デボラ あなたという人が分かりかけてきたようだわ、セアラ。

セアラ 何が分かるかと、どうでもいいことです。ご自分の夢の中だけにいて、私や私のものはほっといて下さい。今ではサイモンは私のものです。（丁寧に）私、帰らなくては。私がどこに行ったのかとサイモンが心配し始める頃でしょう。このことは口外しないとお約束します。それでは、お暇申します。<sup>いとま</sup>お義母様。

デボラ （顔をあげて——冷ややかに）さようなら。私の方も、お約束しますわ。あなたの御主人には二度と会わないし手紙も書きません。（侮辱を浮かべながら尊大な蔑視を込めて）あなたのものに私が手を出すと思うのですか？

セアラ いいえ。そんなことはさせません。（セアラ、嘲るような笑いを浮かべて右手後方へ消える）

デボラ なんて野卑で下品なあばずれ！もし、私が望んだら——もし、チャンスがあったら——いいえ、終わった——忘れ去られて——死んでしまった。人生みたくに、安っぽくて、卑

しくて汚らわしい。人生にはもう関わらない。(だんだん、デボラの張り詰めた感情が緩み、眼はうっとり夢見るようになり、目の前の虚空を見つめる)

ベルサイユ宮殿で —— 王と私は月の光に照らされた庭園を歩く —— 「愛しきものよ。我が玉座、そは汝が心。我が美しの王国、そは汝が美なり」 —— (デボラ、はっと夢から我にかえって、ぱっと立ち上がる) だめ！ 私はあの狂った幻の恋の夢はよしたのよ！ もう二度と夢は見ない！ 変化と老醜、時と死に向き合って、この世から身を退いてみせる。(苦々しい皮肉っぽい笑みを口許に浮かべて) 結局のところ、他に何ができるっていうの、私に。そうでもしなきゃ、いつだってサイモンに嗤われるだけじゃないの！

— 幕 —

## 第一幕 第二場

### 場面

1836年6月。ある暖かい月夜。街にあるデボラ・ハーフォードの家の庭の片隅。

その右手後方は、高さ8フィートの煉瓦塀で囲まれている。中央に八角形のあずまや。壁と尖った屋根は蔦で一面おおわれている。あずまやの左手と右手には植え込み。その後には、塀に沿って一列のイタリア杉。いろいろな大きさの植え込みはすべて、円錐形、立方体、円筒形、球形、ピラミッド型など、幾何学的な形に刈り込まれ、この場所に奇異で人工的な雰囲気を与えている。あずまやの正面の壁には、漆で朱く塗られた狭いアーチ型のドアがあり、その手前に三段の階段。小さな楕円形の池を囲む煉瓦舗装の歩道の端に小さな石のベンチが二つある。一つは右手正面、もう一つは左手正面を向いている。この池から、二つの小道が右手と左手に真っ直ぐに伸びている。左側の道は、左手正面にある球形の植え込みの後ろを通り、家へと通じている。右側の道は、街路に面したアーチ型のドアへと通じている。そのドアは緑色に塗られて街路に面している。ドアの上の壁の張り出し柵から錬鉄製のランタンが下がっている。その中には、小さなランプが明々と燃えている。

左手舞台裏の小道の向こうから、男達の声が聞こえる。間もなく、ハーフォード家の弁護士ニコラス・ギャツビーが、デボラの次男ジョウエルを伴って現れる。

ギャツビーは、56歳の小柄でずんぐりした男。頭は、ほぼ完全に禿げ上がっていて、丸い赤ら顔に、鋭い小さな灰色の眼。何から何まで保守的な良家の法律顧問の典型的なタイプで、いかめしく尊大な偉ぶった態度と

口調である。自分の職業故の威厳に払われる敬意を極度に意識している。仕立ての良い選び抜かれた喪服を礼儀正しく着ている。

ジョウエル・ハーフォードは29歳。長身に痩せていて、僅かに前かがみの姿勢。顔は蒼白く端正。限られた狭い範囲内であれば、決断力や頑なな潔癖さもない訳ではないが、その範囲を超えると、あらゆる自信も野心も失ってしまう。彼の人となり全てに、どことなく無味乾燥で、堅苦しいピューリタンの要素がある。髪は褐色。冷ややかな淡青の眼。尖った顎に頑固そうな口許。乾いた声音のため、年より老けた感じがする。

二人は池のところまで来て立ち止まる。ギャツビーは、誰かを探し求めて辺りをじっと見回す。彼の態度は、ショックを受けて憤然としていながら、その一方で痛ましいほどに困惑している。

ギャツビー ここにはおられないね。おられるとは思ってなかったが。

ジョウエル (あずまやを指して、冷やかに) あそこに隠れてますよ、きっと。

ギャツビー まさか。そんな——？

ジョウエル 父が死んでからの母は何というか、わざと気の狂ったふりをして——

ギャツビー まあ、まあ、ジョウエル。そりゃあ当然、ショックだよ——  
悲しみもね。

ジョウエル 原因が何であれ、悲しみではないです。

ギャツビー 今、君は「わざと」って言ったね。

ジョウエル ご自分で判断なさったらいいでしょう。

ギャツビー そんな馬鹿な！ 君が生まれる前から、お母さんのことは知っているんだ。変わった人だよ、確かに。癩に障るほど進歩的だし、気まぐれで空想家だ。だが、常に育ちの良い淑女でもあるし、もてなしも上手で魅力的だ。機知に富んでもいい



て、朗らかな人だ——それに——美しい。

ジョウエル ここに来た目的を忘れてますね。

ギャツビー 忘れたいものだねえ。まだ信じられないんだ、君のお父さんが——

ジョウエル 母を呼び出すには、あなたの方がいい。僕は、ここでは一度も歓迎されたことがない。

ギャツビー （あずまやの方を向き、呼びかける）デボラ！（階段の下まで行く）デボラ！ ニコラスです！（間を置く。それから不安そうにジョウエルの方へ向く）どうしたのだろう。あの人に何かあったんだろうか？

（しかし、彼が話しているその時、あずまやのドアがゆっくりと外側に向き、デボラの姿が現れる。後ろ向きで背中がこちら側ドアに向いている。まるで暗闇の中を後ろ向きに手探りで進んできたかのようである。片手を後ろに伸ばしてドアのノブを手探りで捜している。顔は、彼女が逃げてきた何ものかへと向けられたまま。ドアが開くと、ドアに押しつけられた彼女の体は、ドアに向き、ドアの動きにつれて動き、三分の二ほどドアが開くのに合わせて、体も左手正面に向く。だが、顔は依然として後ろを向いたまま、自分の肩越しに暗い内部を見つめ返している。突然彼女の体に小さな身震いが走る。彼女は息苦しそうに喘ぎ、視線を内部の暗闇から引き離し、ドアを後方に、家と反対側に大きく開け放ち、正面を向く。ギャツビーは、彼女の顔を見て、思わず驚きの声をあげる。

デボラは今や、49歳という年齢よりもずっと老けて見える。オリーブ色だった顔は、不快なまでに黒ずんでいる。乾いた皮膚が骨の上にびったりと張り付いていて、蛇の抜け殻のように生気がない。黒い眼は陰鬱な眉の下で深く落ち窪み、病的に熱っぽく光っている。その二つの目は、彼女の小作りな卵形の顔の中では、以前にもまして大きく

見える。

鼻から唇の両端にかけて深い皺。唇は委縮したように見える。頬骨の下もほっそりした首も、げっそりと窪んでいる。彼女の顔には、死の影。頭蓋骨が肉の仮面の下から現れ出そうである。それでも今なお、彼女の容姿はどんな動作をしても優雅で、顔とは対照的である。白づくめの衣装。)

デボラ (ギャツビーを見つめる —— かつての音楽的な響きは失われ、抑揚のない張りつめた低い声で) 来て下さって嬉しいわ、ニコラス。私、もう二度とあそこへ入ってはいけないわ!

ギャツビー あそこには、何か恐ろしいものがあるのですね?

デボラ 何か恐ろしいもの? この自分のほかに? いいえ、私だけよ、あそこにいるのは。私の心。私の人生と、呼んでくれてもいいわ。だって、私は心の中でしか生きてこなかったんですもの。私の心は、最後にとうとう恐ろしい牢獄になってしまった。亡霊や死体でいっぱい。そうよ、おしまいには —— もうそのおしまいに来てしまった —— 1分でいいから何も考えないですむ平和が欲しい。1秒でいいから、何も聞かずに自分を受け入れて欲しい。その望みが余りにも恐ろしいものになってしまって。逃れるためなら、私何でもする。何でもあげる。私はそれが怖かったの。あなたに呼ばれてから後のことよ —— 呼ばれる前は恐怖はなかった。呼ばれる前には、憧れで陶醉していたから、恐怖なんか忘れてたわ。そして、逃げ出したいという誘惑があった —— ドアを開けて —— 勇気を出して敷居を超える誘惑が。結局、一体、何故怖がらなければならないの? 何を失わなければならないというの? ここにいる自分以外。

ギャツビー 何ということを、デボラ。まさか ——

デボラ　死ぬつもりだって？　まさか。もっとましな道があるわよ——　まだ生きられる道が——　こうありたいと常に願ってきた女としてね。心を十分に集中させればすむことよ。そして、自分の自由意思で選ぶだけの自尊心があればね。そうすれば、自ずから、生も死も騙せるのよ。そんなこと、私には、いとも簡単！　心の中のドアを押し開けて通り抜けるようなものよ。生涯望んできた自由と共にね。あなたに呼ばれるまでは、私には本当にそのドアが見えたのよ。私が今開けたドアと同じくらい現実味をもって。そしてそのドアの方に手を伸ばしかけて。もう少しで——（恐怖に身を震わせて）呼んでくれてよかったわ。だって、それを実行しても完全に忘れられるって確信はないもの。確信があったなら、私は行ってしまっていたわ。（出し抜けに）いいのよ。恐れなくて、ニコラス。自殺なんかして、あなたの社会的地位を傷つけたりしないから。ヘンリーが死んだことで、死にはまったく幻滅を感じているのよ。

ギャツビー　こんな所へ来て、ヘンリーが死んだことを思い詰めてばかりいるのは、極めてまずいと思うが。

デボラ　思い詰めるですって？　いいえ、ただ夫の死を現実のものとしてしようと努めていたの。ずっと自分に語っていたのよ、「お前の夫は死んだ。今朝埋葬された。もうそろそろ事実と直面する経験をすべきじゃないか」と。ええ、本当に。サイモンといたあの小屋でのあの日から、一生が過ぎたみたい。サイモンの方が、夫よりよほど死んだ存在だもの。あの時の約束をずっと守ってきたわ。つまり、人生を在るがままに受け入れるってこと。自分自身を、上品に引退した老女にすること。毎朝毎晩、鏡に映る自分と直面して、加齢と醜さに、礼儀正しくお辞儀をして——　人生最後の客人として、お迎え

するの —— それは私の体に言い寄る年寄りたち、退屈でしなびた心しかない道楽者。魅力的なお相手ではないけど、女主人たる者、招かれざる客人も大切にしないで。そんな訳で、何年間もそういうお相手と毎日一緒に暮らしてきたの。そして夜毎、床を共にしてきた。ええ、そうよ、その通りなの。自分の意思を訓練してきたのよ、事実に取り憑かれるようにと。まるで売春宿の娼婦だわ！

ギャツビー デボラ！

デボラ 私は、ひどく卑しくて汚らわしい事実さえも、わざと呼び寄せられるようにしてきたの。自分がどれほど現実へと身を退いたかを証明するために。ジョウエルは思い出せるわね。ほらいつかの夕食の時、私が、主人にこう尋ねたことがあったわ。「この頃、お仕事はどんな具合ですか？ 私、とても関心があります。ジャクソン大統領は合衆国銀行と争ってますが、そのためにあなたがやってらっしゃる貿易は不利になったりしません？」沈黙がさっと襲ってきたっけ。主人とジョウエルの目が呆気にとられていたわね。この異質な女が、全く気でも狂っちゃったんだろうか。いや、また突飛なだけだ、デボラはいつだって突飛なんだ。

ジョウエル 今のお母さんがまさにそれですよ。それに僕たちは、そんな話を聞いている暇など ——

ギャツビー (デボラをずっと見つめている。何が何だか分からず困惑し、同様に彼女の絶望に気付き、心を乱されていたが、今度ではきばきした専門職らしい態度を取り戻そうとして、勿体ぶった咳払いをする) なるほどね、デボラ。

デボラ (彼を無視して) そして今、夫は死んだ。私は自由。それが分かるかしら？ (ゆっくりと頭を横に振る) いいえ、分からないでしょう。あの人の死は私の中で現実のものになってい

かない。無意味なのよ。多分、私の方が余りにも死んでいるからだわね。あの時私は忠実ぶった妻としてあの人の枕もとに座っていたわけ。あの人は苦しむというより、苛々して怒っているみたいだった——まるで、自分の魂を輸出する条件について、神様と話し合う大事な取り決めがあるのに、生が必要以上にあの人を引き留めているかのようだった。それから、無がやってきた——満期になって失効。そして無になったの。死は、それ自体大したことだと私は考えていたのかしら——生の終わりだけというのではなく、一つの始まりなのだ。死がドアを開けて、部屋に入って来る。私にも見える。そして善なる生の王が、安息の宮殿へ導くために、ついにやって来る——生涯待った逢引きの約束を果たすためにやって来る恋人。そんなふうを考えていたのかしら。もし、生に意味があるなら、その終局にも同じ位の大きな意味があると考えてもかまわないのではないかしら——例えば、ただ一つの文章の終わりのピリオドくらいには。ところが、何の意味もありはしない。死というものは、人間の私も死んだ猫も一緒に無造作に放り込まれる泥の井戸に過ぎない。（こめかみに両手をあてる）おやまあ、私がああドアを開いて逃げたい誘惑にかられていたんじゃないかって思ってるの？ 正直今でも、誘惑にかられてる——もうこれ以上、自分の心に捕らわれて苦しむのには耐えられない——解放されるためなら、どんな犠牲を払っても——

ギャツビー デボラ、まあ落ち着いて。こんな——こんな振舞いは全くあなたらしくない。

デボラ （彼を見つめる——突然態度ががらりと変わる。彼に微笑みかける。彼を面白がって愚弄するような微笑み）お咎めは確かに伺いましたわ、ニコラス。わざわざ、おいで下さった

のはどういう訳か、お伺いしてもよろしいかしら、おふた方？ 私の庭で会うなんて、滅多にない嬉しいことだね、ジョウエル。

ジョウエル 言うておきますが、事情がこんなでなかったら、僕は決してここにお邪魔したりは——

ギャツビー 事情というのは、こうなんです、デボラ。あなたのご主人ヘンリーの私的な書類を調べていて驚くべきことが判明しました。全くのところ私は自分の目を疑いました。ヘンリーのごときは小さい時からよく知っています。ヘンリーがあんな理不尽な愚行をするなんて、どう考えてもありません。

デボラ 理不尽な愚行？ そんな言い方、ヘンリーのこととは思えないわ。座りましょう。その方がこの不可解な話のことをもっと冷静にお話しできそうですから。

(デボラ、あずまの階段に腰を下ろす。ギャツビーとジョウエルは各々池のそばにある前方左右のベンチに別々に座る。)

ジョウエル お父さんの金庫の中に二通手紙があったんです。一通はギャツビー宛、もう一通は僕宛です。

ギャツビー その手紙には、ヘンリーが密かに、西部の土地にギャンブル同様に投機をしていたことが打ち明けてありました。

デボラ ギャンブル同様の投機？ ヘンリーが？

ギャツビー そうです。信じられないことです。

ジョウエル その結果、会社は倒産寸前という訳なんですよ。

ギャツビー この数年間資産を使いすぎて失敗したようです——新しい船を造るのに金をかけすぎて——やたらと借金をしたんです。だから、まともな地位を取り戻したいという誘惑に負けて、西部で手っ取り早く儲けようとしたんです。もちろん、

投機は失敗でした。ヘンリーのように名誉を重んずる保守的な事業主に、そんな無茶な投機のことなんか、分かるはずがないじゃありませんか？

デボラ 全く知らない人間と生涯を共にしてきたみたいなのがするわ。あの人の心にそんな愚かさや勝負師の大胆さが隠れていたらなんて私が知っていたなら——私どうしていたかしら？（肩をすくめる）もう遅すぎだけれど。

ジョウエル お母さん、僕は会社が倒産寸前だって言ってるんですよ。

ギャツビー ヘンリーが手紙の中で、取るべき手段を提案しているんです。うまく交渉が成功すれば、会社を救えるような手段を。

デボラ （無関心に）じゃあ、その手段とやらを実行すればいいだけでしょ、ニコラス。

ギャツビー あなたの同意がなければできないんです。ヘンリーの遺言では、会社はあなたとジョウエルの二人に譲られることになっています。付け加えますと、ジョウエルの同意はもう済んでいます。

ジョウエル それが、お父さんの思い出に対する僕の義務だと思いますから。

デボラ ねえ、ジョウエル、あなたが生身の人間ではなくて剥製だと確認したくって、つねってみたいと何度思ったか知れないわ！

ジョウエル （冷ややかに、無関心に）僕が、お母さんにとって退屈な人間だってことは、昔から分かってますよ。兄さんの方がずっと気が合うに違いない。

デボラ （体を硬くする。ジョウエルと同じくらい、顔付きが冷やかできつくなる）ねえ、あなたの兄さんが、この事とどんな関係があるというの？

ギャツビー それが、何から何まで関係があるんです。

デボラ        こんな話に、あの子の名前を持ち出すのは真っ平だわ。あの子のことは、もう忘れてしまったのに。

ギャツビー    デボラ、会社のためなんだ——

デボラ        会社なんて、どうでもいいわ！

ジョウエル    この家を売らねばなりませんよ。何もかも失います。どうします？ 兄さんと奥さんのところへ行って、お願いだから同居させて下さいって慈悲を乞うんですか？

デボラ        そんな事、乞食をしたって——

ジョウエル    もちろん、いつでも僕と同居して頂けますが、しかし帳簿係の給料では——

デボラ        そんな事をよく想像できること——

ギャツビー    あなたの立場は—— えー、不安定というか—— こうすれば別だが—— つまり、ヘンリーの提案というのはこうなんです。このような困難な状況で会社を管理するのに不可欠な経営上の経験が、ジョウエルにはないということにヘンリーは気付いていたんです。

ジョウエル    状況がどうあろうと、僕には社長になるだけの能力はないって、お父さんには分かってたんですよ。

デボラ        (不思議そうに彼を見つめ—— ゆっくりと) たまには尊敬したくなることを言うのね、ジョウエル。

ギャツビー    そうなんです。ヘンリーはサイモンの能力には、絶対の信頼をおいていたようですね。サイモンの経歴を注意深く見守っていたようです。

ジョウエル    知ってますよ。僕を通して報告がなされていましたがね。お父さんは、そんな問題で目立ちたくなかったのです。

デボラ        かわいそうに。お父様には他人の気持ちを思いやっている時間など一度もなかったのよ。

ジョウエル    哀れみは嫌いです。



ギャツビー ヘンリーの提案というのは、あなたとジョウエルがサイモンのところへ行って——

デボラ サイモンに頭を下げる？ 以前一度はしたけど——

ギャツビー ヘンリーが勧めているのは、純粹に仕事上の取り引きなんです。サイモンのためにもあなたのためにもなります。ヘンリーは、サイモンの事業がまだ小規模で地場産業程度だということを知っていた——そりゃ、ハーフォード社とは比較にならない。ハーフォード社の社長になることは実業界でも第一人者になることだから。そのことは、父親のもとで働いたこともあり、その仕事を知っているサイモンなら誰よりも分かるはずです。

デボラ サイモンに会社の社長になることを引き受けてと、私が頼みに行かなきゃならないって、そういう訳なのね？

ギャツビー そうです。経営権を渡すのです。会社が破滅から救われるなら、それが至極当然のことです。それに、サイモンならきっと会社を救える手段があるとヘンリーは確信していました。あの人には優れた洞察力があったから、状況を十分見越していて、今我々を取り巻いている危機と破滅とを予見していたのです。（ためらう——それから不安そうに）うーん、もちろん、個人的には困難な側面がありそうだとヘンリーには分かっていたようですが。サイモンがまだ腹を立てていることも知っていたし——

デボラ 目の前に現実があるのなら、その現実としっかり直面しましょうよ。現実を言うなら、サイモンは主人が大嫌いだったのよ。

ギャツビー けど、ヘンリーは明らかに信じていましたよ。あなたとサイモンとはまだ——

ジョウエル 兄さんも、お母さんには破滅して欲しくないでしょうから

ね。

デボラ　　で、私は —— 物乞いの大御所役を演ずる羽目になったって訳ね。ヘンリーはたくさんの点でかの有名な洞察力を失っていたんだわ。一人の重要人物を見落としていたのだから。ヘンリーの見通しの甘さを嘲笑い、それがこの上ない喜びである人物をね —— サイモンの妻よ！ セアラが同意するだろうと、もしあなたが考えているのなら —— とんでもない。ヘンリーにプライドを傷つけられたことを、彼女は決して忘れたりしない。

ギャツビー　ヘンリーにもそれは分かっていた —— その —— 明らかに、あなたの駆け引き技術に頼っていたんですよ。セアラを説得するための。

デボラ　　私が？ 私は憎まれているのよ！

ギャツビー　更にもう一つ、ヘンリーの提案があるんです。この提案をできるだけサイモンや彼の —— まあ何というか —— 家族にとっても公平なものにするためなのですが。ヘンリーの考えでは、サイモン達も今の家を売って街へ出て来なければならぬだろうし、それに、この家は、あなたとジョウエルの二人には余りにも広すぎるだろうから ——

デボラ　　だから、あの卑しいアイルランド女狐と子狐達に、どうぞ私の所にお住まい下さいとお招きしろって言うのね！（小気味よさそうな微笑みを浮かべて）そうね、こんな結構なチャンスは願ってもないことかも知れないわね —— （それから前にもまして激しく抗って —— 激怒して）いやよ！ よくもそんな恥さらしな提案が！

ジョウエル　この提案をしているのはお父さんなんですよ。

デボラ　　そして、私は妻としてあれこれ催促される義務からやっと逃げ出せたと思っていたのに。本当に全く、あの人が死んだと

いうのに、それだけの意味さえもないというの？

ジョウエル 僕たちは、お母さんの同意を待っているんですよ。

デボラ あなたは相当執念深い集金人になれそうだと、ジョウエル。(激しく) いや！ そんなのはいやよ！ 私が会社と何の関係があるっていうの？ つぶれりゃいいのよ！ 私が貧乏を怖れるとでも思ってるの？

ギャツビー うーん。お宅の弁護士としては、同意を強くお勧めしますがね。

デボラ (立ち上がりながら) いやよ！ 言っておきますけど、私は何年も前に誓ったのよ。こんな低劣な陰謀には絶対に巻き込まれないって！ しかもあの頃は、私もまだ生きることを望んでいたのよ。それを今になって、私を唆すとでも？ もう今では、醜くなって、心の中でしか生きられない、諦めきった年寄りになったっていうのに。時間の無駄というものですわ。おふた方。(尊大に退去せよという身振り)

ジョウエル (冷ややかに非難して) あなたの気まぐれで、僕たちをどれだけここに待たせれば気がすむのです？ 僕は、いつだってこの庭が嫌いだった。(嫌悪の念で辺りを見回す) 自然なものは何もない、自然でさえも自然じゃない。

ギャツビー (自分もあたりを見回す —— まるで庭からの目に見えない力と闘っているかのように) そう、デボラ、この雰囲気は、言うなれば —— 通常感覚をおかしくしてしまう。(それから、まるで庭からのその見えない力に支配されたかのように、彼女を見つめて、つかえながら喋る) ねえ、デボラ、どうして年寄りだなんて言うんです？ とんでもない！ 醜いだって？ あなたは、美しい！

(彼女の顔が本能的にぱっと明るくなる。熱心な感謝の微笑みを浮かべる。)

ギャツビー そうさ、街中の未亡人の中であなたが一番魅力的だ！ 私  
だって、チャンスさえあれば、飛びつきたいと ——

(デボラは満たされたような小さな笑い声を漏らす。彼は急いで言葉  
を続ける。)

ギャツビー チャンスがあったという訳では —— 分かっています。それ  
に、今はこんな話をしている時じゃない —— 許してくれよ、  
ジョウエル。君のお父さんは、ちょっとした罪のない戯れな  
ら、いつでも許してくれてたんだ。君のお母さんが、チビで  
太った男なんぞ真面目にとりあたりする筈がないと知って  
たからさ。他のどんな女性も同じだ。もちろん、ナポレオン  
という男もいた。だが、私はナポレオンじゃない。もっ  
とも、時にはそんな夢も —— (突然彼女の目から視線を引き  
離す —— 苛々と不満の独り言を言う) うーん。この歳で、  
しかもこの職業にある私としたことが、何と下らん事を！  
デボラの目はいつだって私を馬鹿にしていたのに。(反発し  
て —— 極めて職業的な威厳をもって) こんな子供っぽい振  
る舞いはよして下さい。名誉ある道は唯一だってこと、お分  
かりでしょう。家柄と名誉を重んずるなら、あなたがとれる  
選択の余地は他にはないんです。

デボラ (緊張した熱っぽさを底に秘めて) そうね。そういう見方で  
だけ考えるのが私の務めのようなね。そうだとすれば、私には  
選択の余地など全くない。そうよね？ 宿命ね！ (奇妙に怯  
えたように切迫して) でも、あなたが証人になってくれるわ  
ね、ニコラス。私は精一杯反対したのよ。私は望まなかつ  
た。そして全身全霊で拒否したのよ。

ジョウエル 同意しますね？

デボラ （ゆっくりと —— 不本意に、言葉を搾り出すように）ええ、同意するわ。ああ！ もう一度人生を生きてみたいという誘惑は感じるのに —— なのに、私は怖い！

ジョウエル これで片付いた。明日サイモンに会いに行きましょう。馬車の手配は僕がします。（母親に向かって、冷ややかで丁寧なお辞儀をする）お休みなさい、お母さん。行きましょうか、ギャツビーさん。

ギャツビー ああ、ジョウエル。（ジョウエルと行きかける。それから立ち止まり、デボラをちらりと見やってから）先に行ってください。すぐ後から行くから。

（ジョウエル、立ち去る。デボラは自分の前を見つめている。ギャツビー困ったように咳をする。）

ギャツビー 本当に、デボラ —— 私には分からない。唯一分別ある道に同意するのに一体どんな心配があるんですか？

デボラ 私は自分自身が怖いよ、ニコラス。

ギャツビー 馬鹿なことを！ これであなたの気も紛れようし、人生に新しい関心も見つかるでしょうに。

デボラ ああ、それが新しい関心でさえあればね、ニコラス。死んだものから蘇った古い関心でなくて。そうだったらどんなにか喜んで歓迎することでしょう。夢にも見なかった奇跡を下さったことに、神様にどれだけ謙虚に感謝するか。ああ、私、自分の中にある死から蘇りたいとどれほど祈ったことか！ 分かってもらえたらね！

ギャツビー 私には —— あなたの言うことが、どうも理解できない。

デボラ （無理に微笑 —— 嘲笑的だが、同時に優しさが籠もっている）ええ、そうよね。だからこそ、あなたには自分の秘密を

全部話しても安心なのよ、ニコラス。

ギャツビー あなたは昔、どれだけサイモンに献身的だったことか。奥さんのことだって、好きになれるかも知れない。先入観を捨てれば、あの女がこれまで評価すべき妻であり母であったことを、きっと認めますよ。私が、あの人の立場を弁護したりすると、攻め立てられそうですが——

デボラ 攻め立てたりしないわ。私に対するセアラの気持ちも理解できるもの。彼女の立場だったら、私も同じ気持ちになってたかも知れないもの。(皮肉っぽく微笑む) ねえ、私って公平でしよう？

ギャツビー (熱心に) ええ、その通りです！ しかし、私が一番考えていたのは、お孫さん達のことなんです。子供達があなたに良いチャンスをくれますよ。お孫さん達には悪感情を持ってないでしょうし、過去のことで責めることは何もない。子供達にはあなたの血が流れているんですよ。子供たちがこの庭で——

デボラ ええ、よく分かるわ、ニコラス。まるで素晴らしい神の啓示のようじゃない —— あなたが言ってくれなかったら、こんな思いもよらない希望は決して生まれなかったでしょうね。新しい人生へのチャンスになるかも知れない。死んだ自分から逃げ出せて、諦めて祖母というものになれるかも知れない！ あなたには驚いたわ、ニコラス。赤ん坊から知恵を授かるという話は聞いたことがあるけど、独り者からだなんてねえ！ きっと私を善女にしようと思って下さるのね、ニコラス。(彼女はそっと笑う —— それから、彼が傷ついたのに気付いて、素早く) いいえ、からかったりして、ごめんなさい。私、本当に感謝しているのよ。どんなに感謝しているか分かってね。そしてあなたに誓ってもいい、やってみるっ

て。たやすいことではないでしょうけど。だってセアラがどんなにひどく私のことを疑っているか、あなたは知らないでしょう。というか、セアラがどんなによく知っているか——昔の私の正体を。下心はないって納得してもらって、子供達についても私を信頼してと説得しなければ。かなり狡猾にならなくては。とても控えめで卑屈に。（突然、自分に腹を立てる）いやよ！ 見せかけの自分になって、芝居するみたいな言い方！ でも、今の私は控えめ！ 本当に卑屈ね！ 生まれかわるためにこのチャンスがもらえるなら、喜んで跪いてセアラにお願いするわ！ チャンスをくれるなら彼女を愛することもできる！ もし信頼されたら、自分自身をもう一度信頼する術を学べる！ セアラにも子供達にも私を愛してもらえる！ もう一度愛せるようになれる！ まあ、自分でも驚くわ。善女になる才能があったなんて夢にも思わなかった！ 脱出の見通しができたらもう、自分の中で生まれ変わるって気持ちが湧き上がってくる。自由になれるのね！

ギャツビー そうだとも！ 素晴らしい！ 嬉しいよ、あなたが——  
デボラ 私の脱出を証明するために——象徴としてだけど——よく見ていて、証人になってね、ニコラス！ 自分の中の悪魔、昔のデボラを追っ払ってみせる。心と精神の中で嘲りの場所から引きずり出して、本来いるべき場所へ押し戻してやるわ。ほら、あそこの——永遠の闇の中へ。（あずまやの階段を昇る——最後の一押しして）「我から離れよ、汝、呪われた者！」（ドアノブをつかみ、ドアを閉める）そして、ドアを閉めて！ 鍵をかけて！（ドアを閉めて鍵をかける）ほら！ さあ、お前の夢を疑い、愚弄して、嘲笑するがいい。醜さと床を共にし、自らを否定して。やがては、狂気に恋を

して、取り憑いてと頼むのだ。静寂の中で叫び、壁を叩いていれば、そのうち飢え死にしてしまうさ。長くはかかるまい、もう、貪り食う私はいないのだから。人食い鬼め！

ギャツビー まあ、まあ、デボラ。全くあなたらしくない。

デボラ (ギャツビーの方を向いて) 終わったわ！ もうこれまでのデボラは死んだわ。シーッ！ 聞こえる？ ニコラス。

ギャツビー 何が？

デボラ 壁の向こうの足音。遠ざかるのをやめたわ。人生が私のことを忘れていたって思い出して戻って来るのよ。(突然、ギャツビーの表情に気付いて、急に気取らない、からかう笑い声をあげる) まあ、ニコラス！ なんて驚いた顔！ 聞こえたのは泥棒の足音とでも思ったの？

ギャツビー いやはや！ 思うも何も。全く、人生だって！ よりによってこんな馬鹿げたことを、ひどいじゃないか、デボラ！



## 第一幕 第三場

### 場面

街からおよそ40マイル離れた織物工場地区にあるセアラ・ハーフォードの家の居間。翌晩。部屋は小さく、その当時の典型的なもの。家具の趣味は、良くも悪しくも目立つほどではない。快適で、適度に裕福な雰囲気。正面中央左手には、ランプが置かれたテーブルと椅子が三脚。左手壁面中央の閉まったドアは、サイモンの書斎に通じている。後方左隅にはソファが一つ。また、後方中央壁面には、玄関ホールと二階に行く階段とに通じる戸口がある。その戸口右手には、飾り棚が一つ、上にランプがのっている。右手壁面には窓が二つ。そこから前庭と通りが見える。窓と窓の間には、机と椅子が一つずつ。右手正面には大きな肘掛け椅子がある。

幕が上がると、後方ホールのあたりから、子供達の何か言い合う声が階上から吹き抜けを通過して、聞こえてくる。それから、セアラの子供達をたしなめる声。しばらくは静かになる。この間に、左手のドアが開き、サイモンが登場。体格には大した変化は見られない。引き締まった体格で、10ポンド位増えてはいるが、それでも、以前と同様、動きの自由なガッチリした贅肉の少ない体型である。ニューイングランド系の大造りな顔立ちには、31歳という年齢が表れている。しかし、その性格を投影している表情には、かなり顕著な変化、即ち、神経質に張りつめた様子が見られる。それは働きすぎているため、自分自身に対する圧迫感から解放されることのない精神的緊張である。部屋に入って来た時の彼は、眉をひそめ、何かに気をとられているような目をしている。テーブルに近づき、うわの空で、立ったままテーブルを見下ろしている。階上から聞こえてくる騒ぎに驚く。子供達の興奮した叫び声、天井から響いてくる取っ組み合いの音、

続いてドンドンと響き渡る物音と笑い声。サイモンの顔が笑顔になり、ひとりクスクス笑う。

それから、セアラの指示する声が聞こえ、騒ぎはおさまる。サイモン、テーブルの左手前方に置かれた椅子に座る。テーブルの上に折り畳んであった新聞を二つ取り上げ、一つは脇にやり、もう一つの方を広げかけて、ためらい、やがて意を決したように広げる。ある記事に目を留める。読み進めていくうちに、次第に顔はこわばり険しくなる。読み終わると、新聞を膝に置き、新聞の上をじっと見つめている。セアラがホールの階段を降りて来るのが聞こえる。サイモンは急いで、自分の考え事を抑える。笑顔を作って後方のドアを振り返る。

後方よりセアラ登場。頬を上気させ、髪は片側が乱れ、目は笑い、優しい母親らしい愛情に満ちている。愛する幸せと満足とで自信に満ちた雰囲気。妊娠していた頃に比べると、はるかに美しい。肉付きの良い容姿だが、美しく均整がとれ、豊かな胸と引き締まった腰をしている。

サイモン (立ち上がって、彼女を迎える。笑顔で) やあ！ 上で一体何をやってたの？

セアラ 枕投げよ。(笑う。そして急に恥ずかしそうな顔で) 本当に、私ったら —— あなたが書斎で文章を書こうとしているのに！ (突然衝動的に、サイモンにキスをする)

サイモン どっちみち、今夜はやる気になれなくてね。

(彼女から視線をそらす。セアラは右手前方にある椅子に掛け、サイモンは先ほどの場所に座る。)

セアラ (何気ない調子で) どの新聞を読んでらしたの？

サイモン ギャリソン社リバレイター新聞。

セアラ (不安そうに) あら、隠すつもりだったのに。見せたくなかつ

たの——

サイモン どうして？ 親父が死んだことは知ってたし、葬式の報告記事なんか別にどうってことないよ。

セアラ （怒って）あなたのお母様って、あなたをお葬式にも呼ばないなんて、一体どういうつもりなの。（苦々しく）きっと、私があなたにくっついて行くとでも思ったのね。お偉方の前にみすばらしいアイルランドの親類なんて、大恥でしょうからね。

サイモン まあ、そう言わずに。お袋には分かってたんだ。僕が葬式で、世間体のために悲しい振りをするなんて、親父も望む筈なかったって。親父が死んだ知らせも、自分では手紙を書かずジョウエルに書かせたことについてもね。僕の小屋でお袋に会ったあの時からずっと、一通も手紙をよこしてないだろう？

セアラ 賢い人だから、干渉するのは良くないって分かって——

サイモン 昔くれた手紙が干渉的とは、とても思えないが。

セアラ いつも、あなたに本を書くことを思い出させていたじゃない。

サイモン （セアラを見つめ——微笑みながら）それに反対だった訳か？ この二、三年、本を書けと励ましてくれたのは、誰だっけ？

セアラ そりゃ、私よ。でも、それは別の話（サイモンの手を握り締める——優しく、独占するように）私はあなたを愛してるし、あなたは私のもの、そしてあなたの幸せは私の幸せだからよ。

サイモン なるほど、あんな忌々しいことなんかすっかり忘れてしまったのに、君は僕を書斎に追いやって書かせようとしたものだ。まるで本職の奴隷使いみたいにさ！

セアラ (笑いながら) まあ、あなたったら。私そこまでひどくはないわ。

サイモン でも、しばらくは疑心暗鬼になったよ。そんな本を書くのは下らないと僕に分からせる一番いい方法は、やらせてみて自分で無意味だと悟らせること。そんな実に巧妙な計算があったのかなって——

セアラ (後ろめたそうに) それは違うわ。

サイモン 夜、書齋で僕は、無欲のユートピアが実現可能だと自分に言い聞かせようとしていた。なのに、昼間ずっと会社において、権力と富と財産を求める競争で相手を打ち負かすことに、最高の満足と充足感と誇り、それをものすごく感じていたんだ。(苦々しく笑う) なんて馬鹿なことだ。

セアラ 本のことは、永久に諦めようとしているの？

サイモン 書いたものは全部、暖炉に放り込んで燃やしてしまったよ。そんなに勝ち誇った顔をしなくてもいいじゃないか、セアラ。

セアラ (後ろめたそうに) そんな顔していないわ —— でも、嘘はやめるわね。あなたが自分自身で分かってくれて嬉しいの。あなたが夢見ている社会なんて今の現実の男性と女性相手では、とても実現しないと思っていたもの。

サイモン 例えば、現実の僕達が相手でも？ しかし、君の言う通りだ。あのルソーだって、高邁な理想主義的な夢の中に隠れていただけなんだ —— お袋がいつもやってるのと同じことさ。やり方は違うけどね。君がお袋を咎めるのは当然だよ。本を書く考えを持ち始めたのは、もともとお袋の影響だからね。今になってみると分かるんだ。親父に対する傲慢な軽蔑。当然だが親父は仕事にのめり込んでいたからね。何もかも親父のおかげだったのに。彼女の愛した快適な生活も、私生活の保

障も、壁に囲まれた現実離れした中庭も、そして、お高くとまって偉そうな顔ができるだけの物質的保障も全部！ それにしても、どうして今頃、そんなことを考えているのかな？ 手遅れにならないうちに、自由になれた。そして君に出会えたことを神に感謝している。それだけなんだ。君は、人生に対してとても素直で情熱的だ。在るがままの現実の人生を愛している。健康的で熱心に幸せに生きているし、人生から得られるものは全部手に入れる。（唐突に）でも僕が言いたかったのは、ただ、本についての最終決定だけだったのに。

セアラ 本のことは二度と言わないわ。

サイモン そうだね。君も、毎日新聞を読まなくては。人間というものが、自分自身に何をしているのかを知るために。それに書かれるべき本もあるんだ。取り繕っているのではない在るがままの人間の本質を赤裸々に描いたもの。人間の真実と勇敢に直面したもの。そして、最終的には、在るがままの人間こそ良いのだと、勇気を持って主張すべきなのだ。それが、人間に対する感傷的な道徳観や宗教的な妄想に、いかに衝撃を与えるものであろうとも。事実の世界で、これを新しいモラルの基盤として、現在の我々にある偽善的な見せかけや我々人間についての高潔な偽りのすべてを打ち砕いてくれるような。これは実に魅力的な素晴らしい考えだ。やってみようという気持ちになってくる！

セアラ 古い夢から醒めたと思ったら、もう新しい夢を見始めるなんて、本当にあなたらしいこと！ あなたには、詩人の血が流れているのね！

サイモン よしてくれ！ 詩人の血なんて僕にはなかった。第一それに割く時間がない。この国で商売をするには、今は難しい時期なんだ。全神経、全エネルギーを仕事に集中させなくてはな

らない。あのジャクソンの馬鹿野郎め！ あいつのどち狂った銀行政策のおかげでこの国は破滅だ！

セアラ でも、私達を破滅させることはできないわ！ 5万ドルはあるんですもの。それもほとんどが英国ギニー金貨で。どんな不況になっても、これは大丈夫だわ。

サイモン そう。不況になれば、もっと値打ちが出てくるよ。

セアラ それに、あなたは誰よりも早く不況を見抜く能力があったし。

サイモン だが、僕の商売仇達は、ずっと手を広げ続けてきた。気の毒に、あいつらはもう手遅れなんだ。だから、時が来れば、奴らの先見の明の無さを有利に利用できる立場になれる。その時こそ、商売を広げる絶好のチャンスだ。我々の目標に定めた10万ドルが手に入るのはすぐだ。またはそれ以上に。

セアラ いいえ、10万で充分よ。二人で約束したじゃない——

サイモン セアラ、君には分からないからだ。どんなに特別なチャンスが来るか。例えば、海運業界でも、既に破滅寸前の会社がいっぱいある。近い将来一つぐらいただ同然で買収できるかも知れないよ。

セアラ (心配そうに) だめよ。自分自身の事業だけしっかり頑張つて。何をするにしても。

サイモン 忘れてはだめだよ。僕だって商売の訓練は、まず親父の会社で受けたんだからね。それに、海運の仕事も全く関係がないと言って、無視するわけにはいかない。うちの綿花は船で運ばれてくるだろう？ もし、自分のところで船会社を持つて、できるだけ経済的に効率よく動かすことができれば、うちの工場にとっても、ものすごく有利だろう—— ねえ、セアラ、考えれば考えるほど、チャンスはいっぱい見えてくる。例えば銀行。もうあちこちで倒産し始めている。今すぐ予言

できる ——

セアラ （笑いながら）やめて！ 頭がくらくらするわ！ あなたは、自分でも知らないうちに、アメリカの王様になった夢を見るようになるのかしら！

サイモン それにしても、今、20万ドルあったら ——

セアラ （幼い子供でもたしなめるように）さあさあ、あなたは欲張りすぎよ。そろそろ寝る時間なのに、そんなにたくさん計画を立てたり策を練ったりしていると、寝つけなくなるわよ。

サイモン （椅子に座ってもたれかかり、急に疲れを意識して）ああ、疲れたなあ。でも、もうあの忌々しい本のことは頭から追い出したから、またぐっすり眠れるよ。（サイモン、目を閉じる。そして、再び目を開けて前方を見つめる）人間って、何と自分をひどい愚か者にできるんだろう。実際の自分の姿を故意に否定し続けて、心の中では絶え間ない葛藤を助長する。挙句の果ては、自分自身に逆らって、正反対のものに分裂して生きていくんだ！ 何もかも自由という名のもとに！ どんな夢でも最後には、主人である自分自身が、自分の奴隷にされているのに気付かないなんて！（苦々しげに含み笑いをする）

セアラ ねえ、あなた、やめて。そんな寂しい暗い話 ——

サイモン （暗い気分を振り払って）いや、もうやめるよ。終わってしまったことだ。分裂なんかの話で君を困らせたり二度としないって約束するよ。

（玄関ドアがノックされる、後方ホールより聞こえ、話を遮る。）

おや、一体誰だろう —— ？

(サイモン、立ち上がり、苛立たしげに眉を寄せ後方へ退場。セアラは座ったまま、じっと聴いている。ホールから、サイモンの「お母さん!」という驚いたような声が聞こえ、続いてデボラの「サイモン」という声が聞こえる。セアラ、ぱっと立ち上がり、緊張して身構えて立つ。一瞬怯えたような表情になるが、硬い、敵意に変わる。再びデボラの声。続いてサイモンとジョウエルが冷ややかに形式ばった挨拶を交わす声。間もなく、デボラとサイモンが後方ドアに姿を現す。ジョウエルがその後に続く。デボラは正式の喪服を着ている。極めて青白い顔。外面的には落ち着いて優雅で、育ちの良い貴婦人らしい洗練された様子。その態度には確かに未亡人の喪服にふさわしい静かな諦めの様子が窺える。が同時に、内面的には緊張した高ぶりと、活力と熱意に溢れて、精神の生き生きとした様子も感じられる。デボラの姿を見ると、セアラはたちまちできる限り淑女らしい振る舞いになる。デボラと同じ振る舞い方をして挑戦に応ずるかのようである。)

デボラ (手を差し出ししながら、愛想のいい笑顔を浮かべて前に出てくる) またお会いできて嬉しいわ、セアラ。

セアラ (手を取って、笑顔を返し——多少堅苦しく) とても嬉しゅうございます、お義母<sup>かあ</sup>さま。

サイモン こちらが弟のジョウエルだ、セアラ。

(ジョウエル、形式ばったお辞儀をする。セアラ、この紹介を黙って承認してから、デボラの方へ振り返る。)

セアラ お掛けになりませんか？

(自分の座っていた椅子を示す。デボラ、それに掛ける)



あなた、お義母様のそばに座ればいいわ。

（セアラ、右手前方の肘掛け椅子のところへ行く。サイモン、テーブルの左手正面のいつもの椅子に座り、ジョウエルはテーブルの後側の椅子に座る。）

- サイモン　これはまた驚きましたね、お母さん。
- デボラ　1時間程前に馬車で着いてから、ホテルに行って支度してきたの。
- サイモン　泊まって行って下さいね。部屋はあります。ジョウエルの部屋はないが――
- ジョウエル　僕はとにかくホテルに泊まります。
- デボラ　ええ、ええ、私だって、セアラにお世話をかけようとは一切思ってません。
- セアラ　いいお部屋がいつでも用意できています。南部の農場主の方々がお客でいらっしゃることがあるんです。ご自分の土地にある大きなお屋敷に慣れていらっしゃる方々ですけど。（急に自分の自慢話を恥じ、ごちなく言い添える）断ったりなさったら、私達<sup>わたくしたち</sup>とても気を悪くしますわ。お義母様。
- デボラ　では、お言葉に甘えておもてなしをお受けしましょう。子供達を知る良いチャンスにもなるでしょうし。（一瞬奇妙な哀願せんばかりに熱意をこめてセアラの目を見入る。）
- セアラ　必ず子供達を好きになりますわ。誰だって好きにならずには――（微笑んで）いえ、もちろん自分の子供だから、そう思ってしまうのですね。
- ジョウエル　お母さん、今晚のうちに、兄さんの決心をもらわなければ。僕が、明日一番の馬車で帰れるように。
- サイモン　僕の決心？

デボラ　そして、セアラの決心もよ。(ジョウエルに) サイモンと書斎に行って、そこで自分の使命を説明して。私はここでセアラに話すから。

サイモン　何についての決心ですか？

デボラ　お父さんの最後の望みと、提案されている取引きについてもね(微笑みながら) あれこれ詮索するようにと警告する必要はないわね。

ジョウエル　お母さん！

サイモン　警告下さってどうも。

デボラ　この事については、事業のチャンスとしてメリットがあるかどうか、その点だけ考えて決めるように、というのがお父様の希望でした。それは私の希望でもあるのよ。

ジョウエル　お父さんの提案は、兄さんにとって、並大抵ではなく有利なものですよ。

サイモン　(立ち上がりながら) それはこれから分かることさ。

(左手の書斎へ続くドアの方へ歩きはじめる。ジョウエル、彼に従う。)

セアラ　(警告して) ねえ、サイモン、忘れないで――

サイモン　(振り向いて――安心させるように) 君の同意がなければ僕は何も決めたりしないから大丈夫。

(向こうを向いて書斎のドアを開け、素っ気ない調子でジョウエルに先に入るようにと頷く。二人は中に入りドアを閉める。デボラとセアラ、しばらくの間、お互いを見つめ合う。デボラは奇妙な熱意をこめた哀願といってもいいような表情。セアラの方は疑い深げな、戸惑った顔。)

- デボラ あの小屋でお会いしてから随分になるわね。私がどんなに変わってしまったか、気付いているでしょう。
- セアラ （冷酷な復讐心に満ちた満足と共に）年をとられたようですわね。それでもまだ、ご自分はフランス王の恋人だという夢を見てらっしゃるのでしょうか！
- デボラ 私はもう本当に年寄りだわ、セアラ。あの日以来、そんな夢は見えていないわ。信じられる？ セアラ。
- セアラ 信じますわ。あの時、主人がどんなに嘖ったか思い出したら、それはできないでしょう。（苛立って）でも、そんなこと、私に関係ないお話です。何故いらしたのか、私に何を指望みなのか、全然、分かりません。
- デボラ 思いやりと慈悲を下さいとお願いしに来たのよ、セアラ。
- セアラ 私の思いやりと慈悲？ 今度はどんな企みを？
- デボラ 企みなんてないわ。ただ、お願いに來ただけ——
- セアラ （アイルランド訛りが飛び出す）あんたが、ハーフォード家の大奥様が！ まあ、何てこと！ 父さんが生きていたら、この日を見せてやれたのに！
- デボラ 私が生き返ることのできる唯一のチャンスがあるの。そして、そのチャンスはあなたにしか与えることができないのよ、セアラ。無欲になるチャンスが欲しいの。
- セアラ 中身も分からないで安請け合いはできないよ。
- デボラ 他の人の生活の中で、他人のためになるような、自分のためではなくてね、そんな生活をするチャンスが欲しいの。私は、自分を無欲な母親、無欲な祖母にしたいの。いえ、もっと言えば、優しい義母になりたいのよ。あなたが私の息子の妻として幸せになり、息子には、あなたの夫として幸せになってくれる。それを祝福できるような義母にね。
- セアラ （感動し——衝動的に）まあ、なんて優しい親切な、奥様。

(突然敵意を見せて —— 軽蔑したように) 私を騙そうと企んで、嘘をついてるんじゃないでしょうね。

デボラ あの日、小屋で思った同じことを、今も思うの。あなたと私は、ある意味ではお互いを補い合える、そして、それぞれが相手にないもの、必要とし合っているものを持っているって ——

セアラ 私が、あなたみたいな気取ったお上品ぶりを必要としてるなんて想像なさったら、とんでもない間違いですわ、お義母様。

デボラ (聞こえなかったかのように、言葉を続ける) —— お互い、そのチャンスを与え合えれば、私達、親友にも、同盟者にもなれるんじゃないかしら。

セアラ 私に頼んでらっしゃるのは —— ? (奇妙な愚弄のこもった満足感と共に) 本当に、すっかりお変りになったこと。(不承々々ながら) もう今じゃあなたのことを憎んだりしていません。サイモンについては、今では全部に自信がありますもの。だから、あなたを信頼できたら ——

デボラ とりわけお願いしたいことはね、新しい人生を見つけるチャンスなの。分かってね、セアラ。私がどんなにひどく孤独だったか。長い間夢も見られない虚ろな気持ちで、死にたい望みだけを相手に、庭に座って暮らしてきたわ。子供達の欲張りで幸せな笑い声で思い出さなくては。人生が長々と死を待つようなものではないって。私にそのチャンスを下さらない? セアラ。

セアラ あなたの人生には本当に何も無いのね。かわいそうに。あなたを追い払うなんて残酷で無慈悲なことを、どうして私にできるかしら? だって今は私の方はこんなに豊かで、あなたの方が哀れなほど貧しくて。

デボラ まあ、ありがとう、セアラ。私にとっては、これは生と死ぐ

らい違うのよ！

セアラ （先程の同意を早くも後悔しているかのように、不安げな様子で）でも、こんなことしているのは、ただ、結婚した時貸して下さったお金のおかげで、私達、仕事を始められたからです。（それから疑い深くなり）待って！ これと今弟さんがサイモンに話していることと、どんな関係があるんです？

デボラ （微笑んで曖昧に）できれば、言わないでおきたいのだけど。私の本当の関心はただ一つ、新しい生き方へのチャンスなの。あなたが与えることができるのよ。あなたとサイモンがお父さんの申し出を受け入れようと受け入れまいと、関係なく。

セアラ でも、その申し出って何ですか？ 話して下さいな。

デボラ （軽はずみに）ああ、私が理解しているのは、ただサイモンが会社の問題管理を引き受けてくれたら、ジョウエルと私は、サイモンに会社経営権を渡すように夫から言われたってことです。

セアラ あの方がハーフォード社の社長にですって？（不意に——そして眉をひそめて）でも、分からない、何故——

デボラ 会社は、きっと今現金が要るのね——

セアラ ああ、そういうこと！ 私達が必死で働いて貯めたお金のことだわ！ お断りします、お義母様。あの人にはあの人の仕事がちゃんとある。それで充分。ハーフォード社など欲しがらない。

デボラ （無関心に肩をすくめて）決めるのはあなたとサイモンよ。主人は、契約の一部として、私の家と庭の所有権を半分、あなた達に譲るようにつて——

セアラ ああのハーフォード邸！ 街でも最高のお屋敷じゃない！

デボラ そうよ。本当にとても美しいし、なかなか値打ちの財産よ、

セアラ。同意してくれたら私がどんなに嬉しいか、言う必要もないわね。実際には、主人の申し出を倍にして、全部譲ってあげたいと思っているくらい。その代わりに私が望むことは、ただそこで同居させて欲しいということだけ。あなたと——それから、孫達と。(笑いながら続ける) 私の側からすると、これは随分厚かましい賄賂だわね、セアラ。でも、私、本当に寂しいし、私には、それはとても大きな意味を持っているの——

セアラ (心を動かされ、また欲も出てきて) 本当に寛大な方ですね。お義母様。(それから用心深く) でも、もちろん、サイモンの考え次第ですから——

デボラ ええ、もちろんよ。さあ、もうビジネスの話はここまでね。(熱心に) 今、孫達に会えないかしら? ええ、分かっているわ。きっと眠ってるわね。でも、ちらっと見るだけでいいの。そうすれば、自分が現実生きて呼吸している祖母という実感が湧いてくると思うの! (楽しそうに笑う)

セアラ ええ、実感できますとも。

(セアラ、椅子からぱっと離れる。デボラも立ち上がる。)

セアラ ちょっと、私だけ先に上がって、寝ているか確かめてきますわ。一人でも起きている子がいて、あなたを見つけたら、とても興奮してしまって、質問だらけになるでしょうから——

デボラ (微笑みながら) 分かるわ。サイモンの時も——(急に言葉を止める。顔が突然激しく怒りに満ちた表情になる)

セアラ じゃあ、すぐ戻って来ます、お義母様。

デボラ (憂鬱を振り捨てて、微笑みながら) これからは私のことをデボラと呼んで下さると嬉しいわ。

- セアラ （本能的に卑下して）いえ、それはちょっと、馴れ馴れしすぎて——（それから自己嫌悪で——きっぱりと）分かりました。そうするわ。デボラ。（後方へ退場）
- デボラ （セアラの後ろ姿を見つめ——嘲るように）年はとつても、演技の才能は、まだまだ落ちていないわね、私は！（それから邪険に）違うわ！ 演技だなんて嘘よ！ 嘘だって分かってるじゃない！ 全部本心からの言葉だったわ！ セアラを好きになってみせる！ 私に、再び人生を与えてくれたのよ！ 私は——

（不意に口をつぐんで再び座る。書斎のドアが開き、サイモンがジョウエルと共に出てきたからである。ジョウエルの表情は、冷たく苦々しい屈辱に満ちている。サイモンは小気味良さそうな満足感と計算高い興奮をぐっと押さえている。サイモン、近づいて、母親の肩に保護するように我が物顔で片手を置く）

- サイモン かわいそうにお母さん、（デボラ、サイモンの顔を嫌悪で素早く見上げ、彼の手から肩をはずす）すぐ取り戻してあげます。お父さんの愚かさのために失ってしまったものを全部。
- ジョウエル 亡くなった人を侮辱するのは卑怯です。
- サイモン でも愚かな真似をしたんだからね。お母さんだって、同じ考えでしょう——
- デボラ 私はジョウエルと同じ考えよ。しょせん亡くなった人は、亡くなった人。（サイモン、驚きと憤慨で彼女を見つめる）それで、お父さんの提案を受け入れたと理解していいのかしら？
- サイモン この僕が断るとでも？ お母さんが破滅しそうな時に。
- デボラ いいえ、そうじゃないの！ 言ったでしょ、この取引きでは、

偽善者ぶった家族の感傷は抜きにしてって。

サイモン 偽善者ぶる？

デボラ お父さんを憎んでいたでしょう。私とも、何年も便り一つなかった。その間に、私達は両方とも、性格が完全に変わってしまったのだから——

サイモン ええ、お母さんがとことん変わってしまったということは、分かってきました。

デボラ とにかく、はっきり言うておくわ。隷属的に愛する母親の役はもう二度と上手く演じられないって。

サイモン 演技だったと認めてくれて嬉しいですね。

デボラ だから、お父様と私の提案を、純然たる仕事の取り引きとして考えてくれないとね。有利だと考えるなら引き受けて。私は借りはいや——あなたにも——どんなことにも。

サイモン いいですよ、お母さん（テーブルに向かって座る——ジョウエルは、その後ろに座る——素っ気なく）ジョウエルにも言いましたが、僕はお父さんの提案を引き受けます。ただ、一つだけ条件があります。お母さんがその条件に同意してくれないなら、この話はなかったものにして下さい。

デボラ 条件って何？

ジョウエル 本末転倒ですよ、お母さん。お父さんの思い出を侮辱してます！

サイモン 破産したお父さんの会社を継ぐために、ここの儲かっている僕の事業を諦めるなんて論外です。お父さんは、虚栄心に目がくらんで、自分の名声を過大評価していた。僕は親の七光りなんて全然要らなかつたし、今だって必要じゃない。僕の条件は、お父さんの会社を吸収合併することです。僕の会社だけが存在するのでなければ。

ジョウエル そうなるくらいなら、お父さんは何度だって破産する方を選



んださ。

デボラ　でも、あいにくあの人はこの世から去って、この私が破産の憂き目に合っているわけ。そうだわね、サイモン。これはあなたにとってまたとないチャンスだわ。その条件で結構よ。

ジョウエル　ずる賢い詐欺師に叩かれてるみたいでいいのですか！　兄さんは無条件で引き受けるはずですよ、もしお母さんが――

デボラ　兄さんにはできるだけ厳しい取り引きをしてもらいたいの――

サイモン　当然のことながら、厳密なビジネス取り引きでは、情け容赦はありません。お母さん。じゃあ、この話は片付きましたね――もちろん、セアラが同意すればですが。

デボラ　ええ、セアラとはもう話し合ったわ。簡単に説得できるでしょう。

サイモン　もちろんです。こういう事では、セアラは僕の助言通りにしてくれます。

ジョウエル　（立ち上がる――サイモンに堅苦しく）ではお暇を。<sup>いとま</sup>朝の便で街へ行って、兄さんが会社の経営を引き受けたと発表してもらいます。

サイモン　早ければ早いほどいい。債権者達が動揺しだすかも知れないからね。

ジョウエル　行く前に――兄さんは、もちろん、僕が今の立場から身を退いて欲しいですよ――

サイモン　いいや。君が優秀な経理部長だってことを分かっているのに、何故？　それに、僕の会社になっても、親父の会社の時と同じ利権を君が受け取れるようにしてやるよ。

ジョウエル　その利権を守るために僕は弁護士を雇います。

サイモン　弁護士がいてもいなくても同じだ。その気になれば、君の利権を騙し取ることなんか簡単さ。しかし、君は無力すぎて敵

にもならない。じゃあ。

ジョウエル 僕は自分の立場を守ります。できる限りのことをするのが、お父さんの思い出に対する僕の義務です——僕の目からすれば、会社はこれからもずっと、お父さんの会社です。

サイモン 君の目にどう映ろうと、どうでもいいさ。

(ジョウエルは彼を見つめ、もっと何か言いかけようとしたが、それから堅苦しくお辞儀をして、後のドアから大股に出て行く。サイモンは眉をひそめながら、後ろ姿を目で追う——それから、突然独り笑いをして、がらりと態度を変えて、デボラに)

サイモン 本当に、あいつは全然変わりませんね、お母さん。人間じゃないですよ。道徳的態度を剥製にしたような奴ですね。

デボラ (無意識に、昔のように親密な気分になって) ええ、私、いつも言ってたでしょ。ジョウエルは神様の作られた剥製の中でも最高傑作だって！

(二人一緒に面白そうに笑う。それから、急に笑いを止めて互いにじっと見つめ合う)

サイモン 本当の事を言いますと、お母さん。なぜお母さんが急にこのように僕に反対するような態度をとるのか、分かりません。

デボラ 今の気持ちは、反対というようなものじゃないわ。そう、無関心くらいかしら。

サイモン お母さん！

デボラ 時間のせいよ。人は皆、忘れて通り過ぎていくの。あなただって夫としての生活がある。子供もいるし。過去は消さなくては。どうして認めないの？

- サイモン いいですよ。確かに認めます。
- デボラ よかった！ やっと過去は葬られたわ。そして、私達はまた一からやり直して友達になれる。私は、セアラの夫としてのサイモンと友達になりたいの。今在るがままのあなたを誇りに思いたいし、今後の偉大な成功もね。私は、現在のこの世と共に暮らすことに決めたのよ、サイモン。そして、世の中も良いものだって受け入れることにしたの。以前はね、物質的な成功なんか、愚かにも小生意気に軽蔑していたけど。それはもう昔のことよ。今は、あなたが財界のナポレオンになるのを見届けるまで生きていたいと思ってるの。
- サイモン （彼女をじっと見つめる） 変わってしまったのですね —— 信じられないくらいに。（セアラ、後方より登場）
- セアラ ごめんなさい、デボラ。長いことお待たせして。私達の話で、ジョナサンが目を覚ましてしまったので、また寝かしつけなくてはいけなくて。（交互に二人をちらりと見ながら —— 疑わしげに） 何のお話？ 弟さんは？
- デボラ サイモンが例の事業のこと話していたのよ —— もう、これでおしまいだといけど。
- サイモン ジョウエルなら、たった今帰ったよ。明日一番の馬車で街へ行かせるんだ。親父の会社を僕達が継ぐって発表するために。分かるかい、セアラ。親父の会社はなくなるんだ、僕らが吸収合併するんだ。
- セアラ まあ、死んだ父さんが生きてたら見せてやりたい —— ！（突然狼狽えたように） じゃあ、あなた全部決めてしまったのね。私の意見を聞きもしないで！
- サイモン 君はきっと同意すると思ってたし、お母さんから君に話してくれてただろう。
- セアラ 話したというより、頼んでらして ——

デボラ ええ。昔のいやなことはみんな忘れて、友達になってくれるようにセアラに頼んだのよ。そしたら、そうしてみるって約束してくれたのよ。

セアラ ええ、そうなの。でも ——

サイモン 二人が友達だ、なんて考えると変だなあ。

デボラ この子は私達が友達にはなれないと思っているのよ、セアラ。

セアラ どうしてなれないの？ 教えて。私達に事業を始める資金を下さったから、私はいつも感謝してきたのよ。

デボラ ええ、この子に二人して証明してあげましょう。私達の邪魔はさせないって。

サイモン お母さん、馬鹿なことを言わないで！ 二人が仲良くしてくれるほど嬉しいことはないってよく知っているでしょうに。

デボラ (笑いながら) ほら、セアラ、旦那様の祝福を頂いたわ。

サイモン 仕事の話に戻ろう。ねえ、セアラ、これは僕達が望んでいたように、事業を拡張するまさに絶好のチャンスなんだよ。それに、僕が夢にも思わなかった素晴らしい取引きなんだ。お母さんのお陰でね。お母さんはただ仕事の上の取引きとしてだけ考えるようにって言ってくれた。取引きの成立した今だから正直言うと、僕達は実質的にただ同然で大したものを手に入れることになるんだよ。

デボラ (笑いながら) 私も同じ。セアラの友情が手に入るの。良き祖母として、人生を再出発するチャンスもよ。(セアラの方を向き —— 熱心に) 二階に行って子供達に会ってもいいかしら、セアラ。

サイモン だめです。目を覚まさせるだけだから。

セアラ ドアからちょっと覗きたいだけですって。

デボラ 絶対に子供達を起こさないから、サイモン。寝ているあなた

をよく覗きこんだものよ。でも、一度も起こした事はなかったわ。

セアラ ええ、この人、寝付きは悪いけど、一旦寝入ってしまうと、大砲を発射したって身動き一つしませんのよ。

デボラ ええ、小さい時もいつもそうだったわね。（笑う）この子は夫になっただけでなく、あなたの息子でもあるのね。

セアラ （笑いながら）結婚した時からそうでしたわ。でも、あの人には聞かせないでね。沽券にかかわるでしょうから。（デボラの腕をとって、優しく）さあ、子供達に会いに行きましょう。

（二人はサイモンを無視して後方へ行きかける。サイモンは完全に疎外された気持ちになって顔をしかめて聞いてから）

サイモン 待って！（二人が振り向くと——傷ついたように）セアラ、せめて、僕がまとめた取り引きの話を最後まで聞いてくれないからだっていいじゃないか。

セアラ 私に全然相談もしないで、話を進めてしまってから、聞いてどうなるの？

サイモン 君の同意を求めるのは、いつも形式だけだってよく知ってるじゃないか。君に仕事の何が分かるんだ。僕だけじゃないか、権利があるのは——

セアラ （突然脅えて、傷ついて）サイモン！ そんなこと、今まで言ったことなかったじゃない！ あなたは——

サイモン 悪かった、セアラ。しかし、まだ何も署名はしていないから、君が望むなら手を引くことだってできるんだよ。

デボラ ねえ、セアラ、分からない？ この子は、ただ、あなたのためにどんなに賢明だったか証明したいのよ。そして、誇りに

思ってるって言ってもらいたいのよ。

セアラ (微笑みながら) 誇りに思ってるって、いつも言ってますよ。そして、結局は、この人を虚栄心でいっぱいにして甘やかしてしまうのです。さあ、それじゃあ、あなた、続けて話してちょうだい。

サイモン (自分を意識して、落ち着かなくなる) 僕の言いたいことはただ —— (突然母親を見つめる —— 冷笑するように) 孫を溺愛するおばあさんだって? お母さんは遊び相手の玩具としてしか子供を扱ったことはないじゃないか —— 僕の記憶に間違いなければ。

デボラ 私が変わったことを信じたくないのよね、サイモンは。

サイモン 証拠があったら見せてもらいたいね。

セアラ まあ、お母さんにそんな失礼なことを言っでは駄目。女性のことなんか分からないくせに。

デボラ 私、二人が親友になれるっていう絶対の確信があるわ。

セアラ さっき、取引きの話で何を言うつもりだったの? あなたは知らないのね。知っていたら、そんな不親切な態度がとれる筈ないわ。あなたのお母様は、街にあるあの素晴らしいお屋敷と土地を私達に下さるのよ。ご自分はただお客として同居なさるだけ。この私が一切の采配を振るえる立場になるのよ。

サイモン そんなこと、同意しかねるね。

セアラ (挑むように) でも、私は、もう同意してしまったわ。自分だけで決めてしまった会社の話に賛成して欲しいのなら、家のことは私に任せるのが至極当然のことでしょう。

サイモン お母さんの家の権利を半分くれるって、親父が提案していたらしいが、半分だって要らないからとジョウエルに断ったんだ。僕達はまず、どこかに家を借りて、そのうちに、自分の

家を買えばいいんだ。恩義を受ける必要なんか——

デボラ 恩義の問題じゃないって言ったでしょ。セアラと私との取引の一部として申し出たのよ。それに、率直に言って、一番得をするのは私だと思うの。今まで通り家に対する特権は全部そのまま。でも、実際には所有権ゆえの責任は一切ない。そして、セアラや孫達と一緒に暮らせる。私の方こそセアラに恩義があるんだわ。

セアラ いいえ、デボラ、私達にとっても願ってもない取引引きですわ。分からないの？ サイモン。全く無償で素晴らしい屋敷が手に入るのよ。広々とした美しい庭で子供達が遊べるのよ。

デボラ 本当にセアラ、ご主人の態度ってとことん無愛想なこと。まるで私が邪悪な年寄りの魔法使いみたいじゃない！ 私と一つ屋根の下で暮らすことを考えると恐怖なのね！

サイモン とんでもない、お母さん。僕は——

デボラ 二、三通の手紙に返事を書かなかったものだから、私に対抗してるみたいね。でも、セアラ、あなたは正しく理解してくれるわね、その理由を。

セアラ ええ。そして感謝していますわ。公明正大でらして、良識を持って——

サイモン じゃあ、対抗してるのは、僕の方だと言うのですか、お母さん。もしかしたらそうかな——今はね——ちゃんとした理由もある——でも、もしそうだとしても、誰が望んだことだ？——（それから突然、冷淡に素っ気なく肩をすくめる）確かに、セアラ、家のことは君の領分だ。君の言う通りだ。潔く君の決定に従おう。僕は会社の再建に全力投球しなくては。（熱心に）分からないだろうなあ、セアラ、これが僕にとってどれほどのチャンスか。なんてすごい取引か。親父

は、保守的経営の深みから出てしまったと気付いた途端パニックになったんだ。危険を大げさに考えすぎて。だが、僕なら簡単に——

デボラ 我らがナポレオンをこのまま野望に燃える運命に委ねて、子供達のところへ行きましょうよ、セアラ。

セアラ 思い描く全世界を手中におさめることでしょうよ。そのうち。

(二人は笑いながら後方ドアの方へ向かう。)

サイモン 待って、セアラ。一言、警告しておきたいんだ—— お母さんの前でね。二人が急に仲良くなったみたいだが、僕には、全面的信頼はおけない。こんな正反対の二人が、毎日同じ屋根の下で暮らさなければならぬとなると、絶えず摩擦や争いが起こって大変だろう。しかし、僕には自分の家庭に平安な雰囲気を求める権利があるんだからね。これから重大問題をたくさん抱えることになるだろうから、家の中のいがみ合いでかき乱されている暇なんかないんだ。だから、頼むから僕のところへは——

デボラ (陽気に—— だが底には奇妙な感情を秘めて) では、ここで厳かに誓います。決して、あなたのところへは行きません。

セアラ どうしたの、あなた。変よ。頑固に、不機嫌に言ったりして——

デボラ そう、私達が妬み合って敵でいる方がいいみたいだわね——

サイモン よく知っているはずだ。セアラも。二人が、よく理解し愛し合ってくれたらと、僕がいつもどんなに願っていたかということ。本当に信頼し合っているかどうか、確かめたかったからこそ反対しただけです。二人が仲直りさえしてくれ



ば、僕は完全に幸せになれるし、将来に絶対の自信も持てるようになれるんです。

（サイモン、二人にキスをする。セアラ、幸せそうに顔を輝かす。デボラ、依然として、からかうような嘲りの色を頬に浮かべたまま。）

— 幕 —